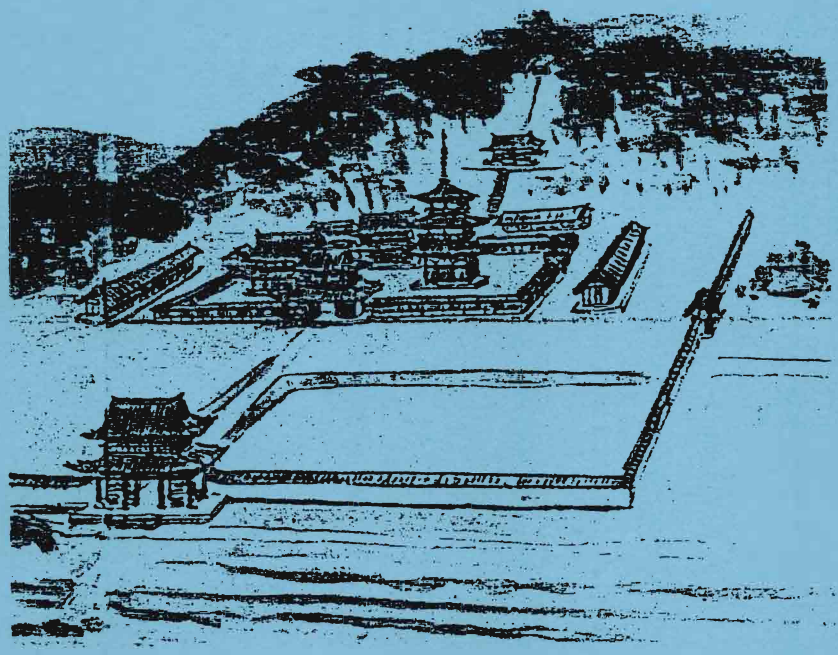
神奈川県考古学会　考古学講座　成果集

かながわの古代寺院

研究の成果と課題



『かながわの古代寺院』の成果集刊行に寄せて　寺田兼方　神奈川県考古学会々長
神奈川県古代寺院研究の新段階　岡本孝之　慶応義塾大学
影向寺址をめぐる問題　河合英夫　玉川文化財研究所
影向寺址に関する発表へのコメント　村田文夫　川崎市市民ミュージアム
横須賀市宗元寺跡　竹澤嘉範　赤星直忠博士文化財資料館
小田原市千代寺院跡と千代南原遺跡第Ⅵ・Ⅶ地点の調査　滝澤　亮　盤古堂考古学研究所
千代廃寺報告へのコメント　荒井秀規　藤沢市教育委員会
下寺尾寺院跡のコメント　河合英夫　玉川文化財研究所
「かながわの古代寺院」研究の成果と課題　河野一也　窯業史博物館
「かながわの古代寺院」に寄せて　鈴木靖民　國學院大学
まとめ　小出義治　神奈川県考古学会顧問

2001年3月11日

神奈川県考古学会

『かながわの古代寺院』の成果集刊行に寄せて

昨年３月に開催された本会主催の考古学講座『かながわの古代寺院』のまとめが、１年近い歳月を傾けた講座関係者の只管な努力により、『かながわの古代寺院－研究の成果と課題－』としてここに見事に結実したことを、先ず会員の皆様方と共に心から喜びたいと思います。講座『かながわの古代寺院』開催に際して、講座関係者の肝煎りで編集されたテキストは、「神奈川県古代瓦出土遺跡目録」（46頁）を付編として実に146頁の大冊でした（追加資料も加えると156頁になります）。そして、今また講座開催の成果として、「研究の成果と課題」という副題を付した立派な成果集（60頁）がまとめられました。その中には、講座当日に配布された追加資料や、「神奈川県古代瓦出土遺跡目録　補」が収録されるなど、細心の配慮が窺えます。単に、講座を開催するだけに終わらず、講座を通して明らかになった「成果と課題」を、このような冊子にまとめて記録することは、極めて重要な意義のある仕事ではないかと考えます。何故ならば、この成果集が、新たな研究の出発点となるからです。

抑、考古学講座の目的は、それぞれのテーマに関して緻密に分析した研究史の基盤の上に立脚し、着実に積み重ねられた最新の研究成果を研究者が発表することによって、全ての会員が自己研鑽を一層深めると同時に、研究者にも情報交換や問題意識を鮮明にする大変重要な機会を提供することにあります。その意味では、この成果集の刊行を以て、初めて講座の目的が全うされたものと思います。

最後に、この成果集を御執筆を賜った先生方には、この場をお借りして篤く御礼を申し上げる次第です。同時に、講座関係者の方々には、大変な御苦労をお掛けしましたが、全会員に成り代わってその労を犒いたいと思います。

平成13年１月20日

神奈川県考古学会々長　寺田　兼方

目　　次

『かながわの古代寺院』の成果集刊行に寄せて　神奈川県考古学会々長　寺田兼方

神奈川県古代寺院研究の新段階　慶応義塾大学　岡本孝之　1

神奈川県古代瓦出土遺跡目録　補　13

影向寺址をめぐる問題　玉川文化財研究所　河合英夫　15

影向寺址に関する発表へのコメント　川崎市市民ミュージアム　村田文夫　18

横須賀市宗元寺跡　赤星直忠博士文化財資料館　竹澤嘉範　23

小田原市千代寺院跡と千代南原遺跡第Ⅵ・Ⅶ地点の調査
盤古堂考古学研究所　滝澤　亮　26

千代廃寺報告へのコメント　藤沢市教育委員会　荒井秀規　30

下寺尾寺院跡のコメント　河合英夫　31

「かながわの古代寺院」研究の成果と課題
窯業史博物館　河野一也　35

「かながわの古代寺院」に寄せて　國學院大学　鈴木靖民　52

まとめ　神奈川県考古学会顧問　小出義治　54

『かながわの古代寺院』正誤表　56

神奈川県古代寺院研究の新段階

岡本　孝之

1　はじめに

2000年３月５日の考古学講座「かながわの古代寺院」の開催によって、神奈川県における古代寺院の研究は新たな段階を迎えたと思う。実際、その後の寺院関係の調査研究と報告が続出している。当日、胸の中にとどめおいた資料もその直後に新聞報道されたり発表されている。今また胸にとどめおかなければならない資料もまた多くなっているが、確実に寺院跡の発掘は増加し、研究は進展していくのであろう。この考古学講座の成果と課題については本成果集において河野一也氏がまとめられているので、ここでは昨年の成果を一覧してみたい。

なお、昨年11月には前期旧石器をめぐる思わぬ事件（あるいは予見されていたといってもよい）が発生したが、考古学においては立場を越えて共同・協働の研究、発表と議論がいかに重要であるかを思わせしめた。すみやかに資料を公開してできるだけ多くの人としなやかな議論をすることが重要である。

2月 5日　「相模国分寺跡の旧説と新説」神奈川県立埋文センター考古学講座（須田　誠）
2月 5日　「古代高座郡の支配機構の動向」同上（大上周三）
2月29日　千代南原遺跡第Ⅶ地点の報告書刊行（小出義治・滝沢亮・小池聡）
3月 4日　下寺尾寺院跡周辺から木簡・漆紙出土（新聞報道）
3月 5日　「かながわの古代寺院」開催（神奈川県考古学会）
3月15日　橘樹郡衙正倉跡の報告書刊行（河合英夫他）
3月18日　影向寺跡出土の文字瓦・橘樹郡衙正倉の発見（新聞報道）
3月18日　相模原市博物館で古代寺院と仏教の講演会を開催（根本誠二・木村衡）
3月27日　『海老名市史考古資料編』の刊行（海老名市・国平健三）
3月31日　『千代シンポジウムの記録集』刊行（神奈川地域史研究会）
3月31日　『平塚市古瓦資料集成』の刊行（平塚市）
3月31日　「相模の古代寺院と後期古墳」『東海史学』34発表（小林健司）
4月 8日　平塚運一展・武蔵国分寺鬼瓦など展示　～5月14日
5月16日　下寺尾寺院跡出土礎石の調査（茅ケ崎市教育委員会・下寺尾寺院跡研究会他）
5月19日　『古代仏教系遺物集成・関東』（考古学から古代を考える会・冨永樹之）
5月20日　「古代高座郡の支配機構の動向」（大上周三）
5月20日　「厚木市山岳寺院跡」の報告（加藤芳明・冨永樹之）
5月21日　宗元寺忍冬文鐙瓦の日本考古学協会での発表（河野一也）
6月 3日　かながわ考古トピックス2000（明石　新）
7月 9日　下寺尾寺院跡の見学会（茅ケ崎市教育委員会・下寺尾寺院跡研究会他）
9月23日　川崎市影向寺文字瓦の一般公開（望月一樹・川崎市教育委員会）
10月 1日　「平塚市四之宮下ノ郷廃寺の再検討」（明石新・若林勝司）
10月 1日　茅ケ崎市下寺尾遺跡群下寺尾地区の調査発表（中村哲也）
10月 1日　川崎市千年伊勢山台遺跡の紙上発表（河合英夫）
11月 2日　小田原市下曽我遺跡の調査（小田原市教育委員会）
12月10日　茅ケ崎市下寺尾遺跡群下寺尾地区の調査発表（中村哲也）
　　香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区出土の木簡・漆紙文書公開展示（於茅ケ崎市文化会館）

2　古代寺院の新しい成果

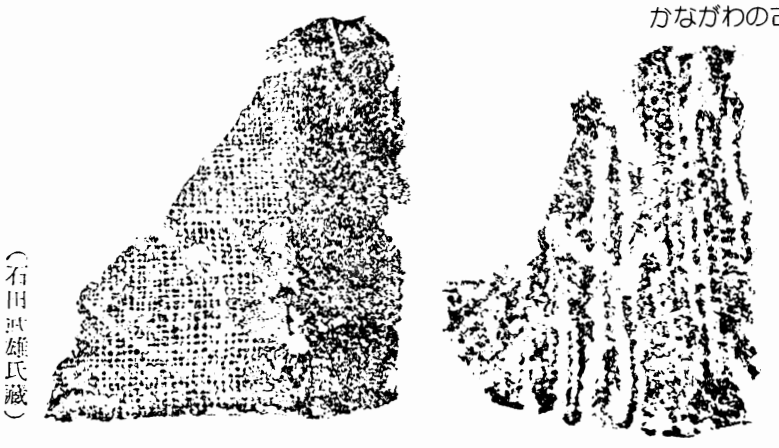
川崎市影向寺出土の文字瓦（望月2000・川崎市教育委員会2000）の発見は、橘樹郡衙正倉の発見とともに当日の講座を盛り上げる材料の一つになると期待していたが、その発表は当日以降にずれこんでしまった。この文字瓦は河合英夫氏が講堂と推定した建物の基礎から出土したことになる。この成果集で鈴木靖民氏らが触れているように寺院の創建者が郡内にとどまらず広域の有力豪族の力を背景にしていることを物語っている。正倉域の発掘調査は今後も継続して実施されるとのことであり、郡衙の中心部である政庁域の発見へと期待が持たれる。当日発表の正倉域の調査報告書が刊行され（河合他2000）、1999年の調査についての概要も示された（河合2000）。

横浜市南区弘明寺山門の解体修理にともなう調査が横浜市教育委員会によって実施され古代瓦を採集している。3月23日に現地、5月9日に横浜市歴史博物館において出土瓦を実見させていただいた。感謝申し上げる。資料集が最初の発表かと思っていたが、弘明寺の瓦は石野瑛氏によって縄文平瓦が図示されており（石野1927）、岡本勇・小川裕久・佐藤安平の三氏によっても平瓦裏面の叩き文の拓本6点が図示されていた（岡本他1978）。第1図に再録して訂正する。また岡本勇氏によって横浜市史作成に際しての分布調査で採集された資料が整理されている。その中に緑区三保町東谷で古代瓦がある（岡本勇1994）。また石野瑛氏によって弘明寺の製陶所とみなされた永田東台遺跡の調査報告が当時の横浜考古学研究会の機関誌「丘の上」第1号、第2号に掲載されていることを知った。位置は私の予想の地点であったが、瓦の図はここにはなかった（石田1928、石田・戸根木1928）。

横須賀市宗元寺の忍冬文鐙瓦については、当日の竹澤氏や河野氏の発表でも触れられていたが、日本考古学協会で河野一也氏により口頭発表され（河野2000）、本成果集でも竹澤氏によってまとめなおされた。なお宗元寺の所在地を御浦郷とするのは赤星直忠氏が最初から認識していたことを指摘された。また資料集p.114の第8図　横須賀市出土古代瓦　公郷瓦窯跡の8は格子目文の叩きをもつが竹澤氏に別遺跡の混入品で除外すべきものであると指摘された。

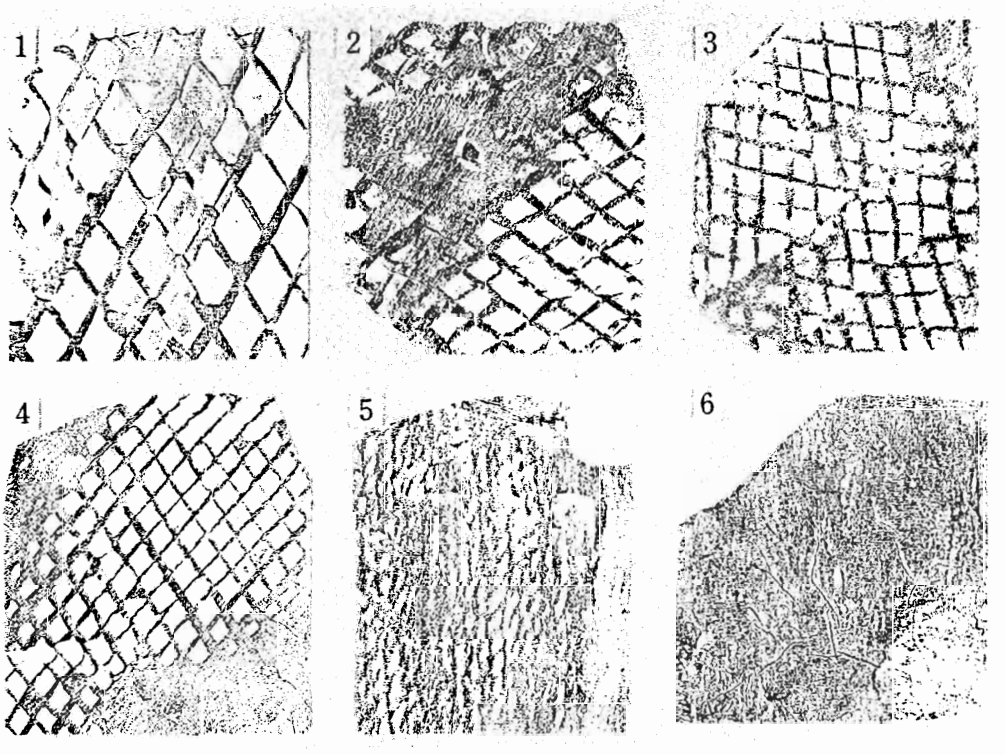
相模国分寺・国分尼寺跡については、『海老名市史』が刊行されて、國平健三氏による新しい見解が示されている（國平2000）。寺域の範囲を発見された溝などから大胆に復元している。これら国分二寺については、河野氏と発表者の須田誠氏の間にも意見の違いがあり、当日コメントした國平氏との間にも違いがあるようである。國平氏は宗元寺の忍冬文瓦が国分寺の瓦に系譜的に連なるとしており、いわゆる初期寺院と国家による国分寺との関連を指摘したものとして注目されよう。海老名市教育委員会による発掘の整理と研究とともに、これからの議論が期待される。また大上周三氏は高座郡における官衙、寺院などについて再検討された（大上2000）。海老名市域内に7世紀後半に高倉評衙が置かれたとし、7世紀末に茅ケ崎市域内に郡（評）衙が設置されたとする。これには中央政権主導のもとに設置されたと考えられ、郡司層は海老名市域を離れることはなかったとする。だが、調査事例の少ない寒川町域の今後の考古学的調査に期待することが大きいのではないだろうか。

茅ケ崎市では、下寺尾寺院跡出土の礎石4点（1997年出土）の実測が茅ケ崎市文化資料館と活動する会考古部会らによって実施され（第2図）、見学会も行われ市民の関心を高めているが（茅ケ崎市教育



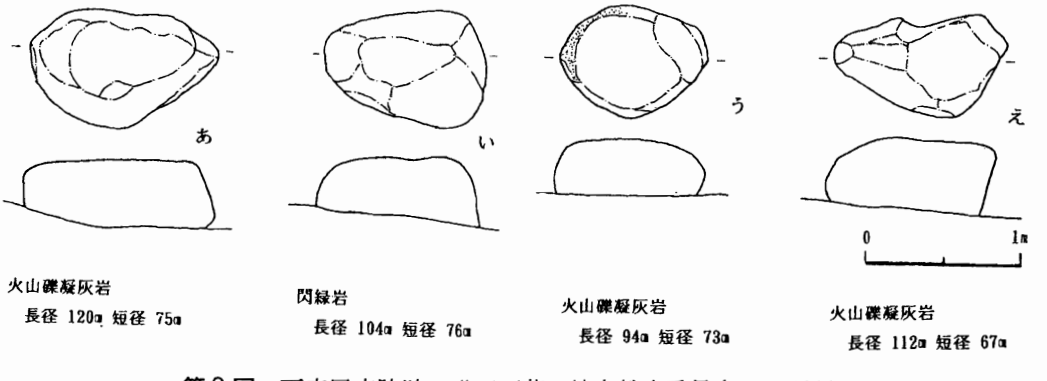
（石田武雄氏蔵）

瓦古の寺明弘市渚横



弘明寺所蔵　平瓦拓影

第１図　弘明寺採集瓦（石野 1927、岡本・小川・佐藤 1978）

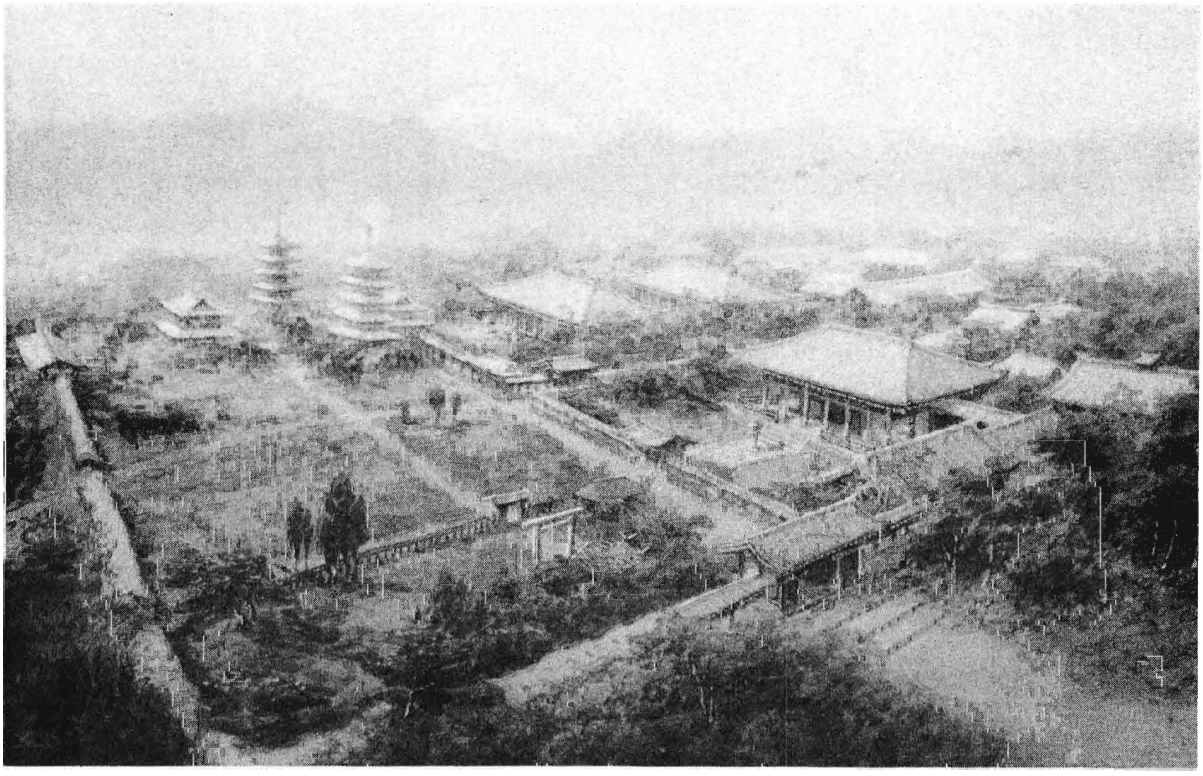


第２図　下寺尾寺院跡の礎石（茅ヶ崎市教育委員会ほか 2000）

委員会他2000)、ついに下寺尾寺院跡の第２回目の発掘調査が７月末と12月に茅ケ崎市教育委員会により実施された。合計５本のトレンチが発掘され岡本らの復元案は大幅な修正を迫られることになった。この調査は継続して実施されるという。その成果に期待するものは大きい。３月には茅ケ崎市文化資料館においてシンポジウムが計画されている。また当日前に新聞発表された香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区出土の木簡と漆紙文書については、10月の本学会の遺跡調査・研究発表会と12月の茅ケ崎市遺跡調査発表会で中村哲也氏により発表され、茅ケ崎市での展示会で公開された。本成果集には河合英夫氏にまとめていただいた（註１）。

愛甲郡では、当日も注目した山岳寺院である厚木市七沢の鐘ケ嶽遺跡の採集瓦が加藤芳明・冨永樹之両氏によって報告された（加藤・冨永2000)。その中には千代寺院跡の６葉単弁蓮華文軒丸瓦（資料集滝澤・小池報告のp.28の第５図のⅡ3）が含まれており、相模西部における寺院相互の関連が指摘された。「下」の模骨文字の存在は、相模国分寺と八王子市の南多摩古窯跡群でも認められることを指摘しており、小田原の千代寺院跡が鐘ケ嶽遺跡を介して南多摩古窯跡群に関連することを予想せしめた。これは後に証明されたという。なお千代寺院跡の６葉単弁蓮華文軒丸瓦は私の推定する講堂跡ではなく、西方の千代540番地の出土である（岡本1999)。

大住郡では平塚市内における出土瓦の集成が平塚市史編纂事務局によってまとめられ、出土遺跡が追加された（平塚市2000)。河野氏は早速これを使って本成果集で再検討された。また高林寺遺跡第12地点の報告がまとめられて、かって小島弘義氏が国府の区画溝と推定したものを再検討して中世の区画溝



天平時代 千代廃寺及び勝福寺復元想像図

—画・堤雄半—

第３図　千代寺院跡の復元図（飯泉山勝福寺1981)

点の報告がまとめられて、かって小島弘義氏が国府の区画溝と推定したものを再検討して中世の区画溝と訂正している（青地1999）。10月刊行の『考古論叢神奈河』第８集には、平塚市博物館の明石新氏と平塚市教育委員会の若林勝司氏による平塚市四之宮下ノ郷寺院跡の再検討の報告がある（明石・若林2000）。これは1961・1962年に実施された日野一郎氏の調査成果（武相学園考古学部1962･1963、日野1967）と近年の調査成果を再整理したものである。『武相学園考古学部活動報告書』は日野先生の遺品から発見されたものである。結果は出土遺物から寺院跡ではなく、国司館などの官衙施設の可能性が強いことを指摘された。また発掘されていた礎石建物は若林氏によって複数の案が検討されているが、私も別案を考えている。

11月９日に平塚市史編纂の仕事で明石新氏らとともに四之宮前鳥神社所蔵の瓦を実測した。平安期以後の瓦だけでなく、下寺尾寺院跡の丸瓦と共通するものがあることは当日でも指摘しておいたが、その瓦に墨で「高林寺」とあるのをみた。これは近年の署名で出土地を示したものと思われるが、もし高林寺の出土が正しいならば明石・若林両氏のアプローチとは別の展開が可能となろう。実際、高林寺に近いかながわ考古学財団の湘南新道関連遺跡（坪ノ内遺跡・六ノ域遺跡など）の発掘調査では興味ある瓦や小型金銅仏などが出土している。なお高麗山北側の地獄谷と呼ばれている地点では良質の粘土が産出し、陶芸家や縄文土器づくりに注目されているという。

足柄下郡の千代寺院跡については、木簡の出土した千代南原遺跡第Ⅶ地点の調査報告書が刊行された（小出他2000）。また神奈川地域史研究会と小田原市教育委員会による「シンポジウム木簡が照らす古代の小田原」の成果が『神奈川地域史研究』第18号にまとめられた。小池聡氏の報告のほかに鈴木靖民氏、荒井秀規氏、永井肇氏らの文献史学からの報告、田尾誠敏氏と岡本の考古学からの報告のほかに、高橋浩明氏、関和彦氏、鳥羽政之氏、河野一也氏らのコメントが掲載されている。併読されたい。

小林健司氏は千代廃寺の建立主体者を後期古墳に求めたが足柄平野になく、結果として大磯町釜口古墳にたどりついた。またその建立は足柄評が上下に分割される以前の飛鳥浄御原令前後としている。古墳との関連はまだ未発見の存在を想定でき、その追跡こそが課題としてあるのではないか。

４月になって千代寺院跡の東方に位置する古墳の発掘調査が実施された。新発見の大形古墳である。６月28日には雨の中、かながわ考古学同好会による千代寺院跡と勝福寺（飯泉観音）の見学会が実行された。勝福寺では1943年に描かれた堤雄半氏の想像復元図（第3図）を実見することができた。油絵とされていたが水彩画のようである。保存もよく、ご住職はこの復元画のように飯泉観音をさらに盛り立てたい意欲をお持ちとのことであり、最近の建造物は古代様式によるよう努めているとのことであった。檀家には小沢良明小田原市長もおられるという（飯泉山勝福寺1981）。また、完形の平瓦と丸瓦（いずれも修復期のもの）があり、実測の機会を持ちたいと思う。

千代寺院跡の修復期の軒丸瓦については南多摩窯跡群との関連が指摘されるようになったが、創建期の瓦についても静岡県富士市の三日市廃寺跡で関連が指摘されている（富士市教育委員会2000）。

さらに、千代寺院跡北方の下曽我遺跡が病院施設の建替えにより再調査されることになり、斎木秀雄氏らによって井戸跡が再発掘された。國學院大学による調査についても大脇直泰氏から各調査次の調査

区配置図が新たに教示されたほか、小出義治氏、寺田兼方氏、山田実氏、金子皓彦氏からも教示をえた。背後の台地上からは瓦の小片などを敷き詰めた道路遺構が発見された(永塚下り畑遺跡　小田原市教育委員会2000)。9月30日と10月25日に遺跡見学会が開かれたほか、11月2日～12日の最新出土品展にも展示された（註2)。

また永塚、高田、別堀など千代の周辺で瓦が採集されていることを、郷土誌などから知ることができた。中でも酒匂川河口に近い酒匂2丁目の大見寺、上輩寺の境内からも採集されているものについては(川瀬1978）実見して確かめたいものである。

冨永樹之氏は、神奈川県内の古代仏教系遺物を集成し（冨永2000)、大坪宣雄氏の集成をさらに充足させた。大坪氏が広く資料を求めて関連遺跡を提示したのであるが、当日のコメントで冨永氏は村落内寺院の規定はかなり厳密に考える旨を発言された。また相模原市博物館の木村衡氏により、村落内寺院の厚木市愛名宮地遺跡と清川村宮ケ瀬遺跡郡馬場№3遺跡が検討されている（木村2000)。

当日の配布資料を本成果集に収録した。かながわの古代寺院は一覧表としてまとめられたが、一部改訂している。

3　これからの課題と期待

私としてもこの一年、弘明寺、下寺尾寺院跡、四之宮下ノ郷寺院跡、千代寺院跡、下曽我遺跡などの調査に関わることができた。

茅ケ崎市の下寺尾寺院跡の試掘調査が実施されたように、寺院跡の発掘調査が重要であり、それなくして各地の寺院跡の保存保護は成立しない。これはもう調査が不可能と思われた横浜市弘明寺での新たな瓦の出土があったように、同じく不可能と思い込んでいる横須賀市宗元寺跡でも期待できることであり、地域住民の協力を得て、積極的に対応すべき問題であろう。大きな飛躍が期待される。瓦の生産遺跡の研究も、新しい情報をえて古い指摘がよみがえることがある。

研究史においても新しい発見があった。古代寺院史・建築史研究に大きな業績を残した足立康氏が1898（明治31）年7月、平塚市（城島村）小鍋島字長島の生まれで、1941（昭和16）年12月に茅ケ崎市南湖院にて病没している。墓地は池上本町の法養寺のほかに伊勢原市下谷の道尚寺（幢昌寺）にも分葬されている（大岡1942、建築史研究会1942)。神奈川県内では1931年の「相模国分寺堂塔建立年代論」(足立1931）が唯一の著作と思われるが、神奈川県の寺院跡研究史のみならず古代史の研究史上に位置づけておきたい。

当日の懇親会の席上で、国分寺市教育委員会の有吉重蔵氏は神奈川県相模地域における研究初期の状況を話された。関東古瓦研究会が結成された時、当初は有吉氏が担当する予定であった南武蔵と相模のうち、相模は河野一也氏の希望により河野氏が担当することになったという。私が県教育委員会在職当時の1980年に綾瀬市早川天神森遺跡の調査を実施した際に、すぐ近くの海老名市杉久保遺跡の調査を担当しておられたのが河野氏であり、ともに縄文時代中期の集落の調査であったため見学させていただいたことがあった。その当時、国分寺の瓦を調査していることは知っていたが、1.5㌧もの量があったこ

とは一昨年になって知ったことであり、瓦の勉強を開始した直後であったとは知らずにいた。今回の考古学講座を機会に、河野一也氏は関東古瓦研究会の神奈川県部会を強化すべき多くの研究者に入会を求め、強い反応があった。私も関東古瓦研究会へ参加して改めて瓦の勉強を始めたいと思う。

当日の発表については録音は行わず、各自のメモと記憶に基づいて原稿を新たに起こしてくれるよう依頼した。成果としては当日の発表やその雰囲気とは大きく違うものもあるが、当日以降の各寺院の研究成果として受け取ってほしい。また全員の原稿を集めることも結果として叶わなかった。原稿も講座の直後にいただいたものから印刷の直前になって到着したものがあり、考古学講座の成果集としては、かなりバランスを失ったきらいは無いでもないが、ご容赦願いたい。

ようやくにして成果集が完成した。講座で発表とコメント、執筆していただいた諸先生方と、当日参加いただいた全ての諸氏に感謝申し上げる次第である。とりわけ、考古学の分野だけとしながらも当日にコメントをいただいた鈴木靖民氏と荒井秀規氏には早くから原稿を送られたにもかかわらず今日まで遅延したことをお詫び申し上げたい。目ざすは5年後である（岡本 2000）。

註

(1)「日本三代実録」に出る漢河寺のことについては不明なことが多く、海老名市の国分尼寺近くの比定地は否定的であるという。私は寒川＝寒河＝漢河であり、下寺尾寺院跡が漢河寺であった可能性を考えている。これが妥当なら881（元慶5）年に下寺尾寺院跡は地震で倒壊したことになる。

(2) 9月30日には千代公民館において三津木国輝氏（郷土歴史家）による「千代台地に繰り広げられた歴史ロマン」と題する講演会が開かれた。資料を小田原市教育委員会の塚田順正氏を煩わせて入手することができた。感謝申し上げる。

文献

青地俊朗　1999「高林寺遺跡第12地点」『高林寺遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ33

明石　新　2000「神奈川県の古代地方官衙の状況　足下郡衙・高座郡衙・橘樹郡衙を中心として」『かながわ考古トピックス2000』

明石　新・若林勝司　2000「平塚市四之宮所在の「下ノ郷廃寺跡」の再検討」『考古論叢神奈河』第8集

足立　康　1931「相模国分寺堂塔建立年代論」『史蹟名勝天然記念物』6－12

荒井秀規　2000「小田原市千代南原遺跡出土木簡をめぐって」『神奈川地域史研究』18

石田武雄　1928「東台製陶所遺跡に就て」『丘の上』創刊号　横浜考古学研究会

石田武雄・戸根木亀之助　1928「東台遺跡出土品（見取図）」『丘の上』2

大上周三　2000「古代高座郡の支配機構の動向」『神奈川考古』36

大岡　實　1942「足立康博士小伝」『建築雑誌』8月号

岡本　勇・小川裕久・佐藤安平　1978「考古資料」『横浜の文化財－横浜市文化財総合調査概報(2)－』

岡本　勇　1994「横浜市内遺跡の分布調査一覧」『横浜の文化財－横浜市文化財総合調査概報(12)－』

岡本孝之　1999「千代寺院跡の再検討」『小田原市郷土博物館研究報告』35

岡本孝之　2000「千代寺院跡の復元と木簡の位置」『神奈川地域史研究』18

岡本孝之　2000「『かながわの古代寺院』を終えて」『考古かながわ』18

加藤芳明・冨永樹之　2000「厚木市七沢の鐘ケ嶽採集の瓦について」『神奈川考古』36

河合英夫ほか　2000『千年伊勢山台北遺跡発掘調査報告書』

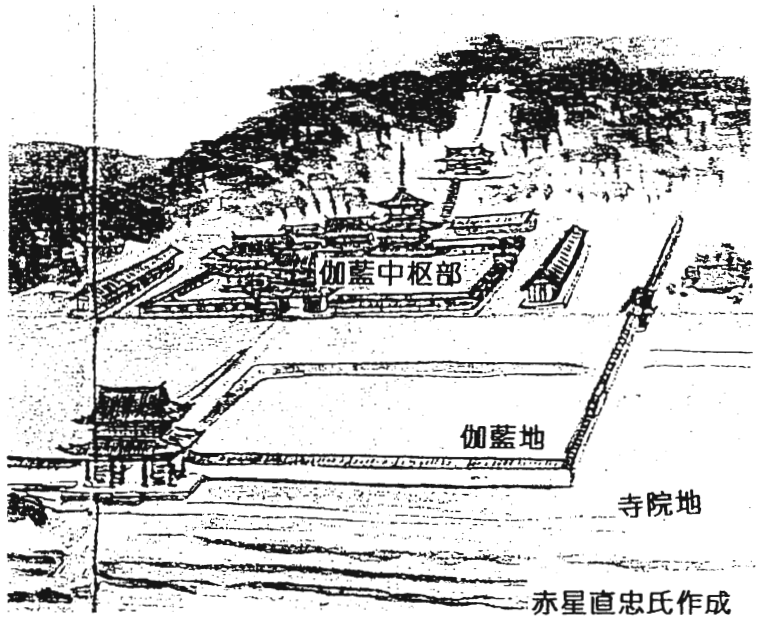
河合英夫　2000「川崎市千年伊勢山台遺跡　武蔵国橘樹郡衙推定地の確認調査」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』

河野一也　2000「シンポジウム「木簡が照らす古代の小田原」に参加して」『神奈川地域史研究』18
河野一也　2000「相模宗元寺の西安寺式鐙瓦について」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』
木村　衡　2000「遺跡からみた古代仏教徒民衆－相模川中流域周辺を中心に－」相模原市博物館　講演資料
國平健三　2000「奈良・平安時代　主要な遺跡の遺構・遺物」『海老名市史1資料編原始・古代』
小池　聡　2000「小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点の発掘調査成果」『神奈川地域史研究』18
小池　聡　2000「神奈川・小田原市・千代南原遺跡第Ⅶ地点」『木簡研究』22
小出義治・滝澤　亮・小池　聡　2000『千代南原遺跡第Ⅶ地点　－千代台地南縁部における低湿地遺跡の発掘調査報告書－』
小林健司　2000「相模の古代寺院と後期古墳－古代足柄評域について－」『東海史学』34
鈴木靖民　2000「千代木簡と古代地域史－千代南原遺跡と出土木簡の意義－」『神奈川地域史研究』18
須田　誠　2000「相模国分寺跡の旧説と新説」かながわ考古学財団平成11年度考古学講座（第4回）資料
関　和彦　2000「古代足柄研究への視点」『神奈川地域史研究』18
田尾誠敏　2000「小田原の古代遺跡－考古学から見た在地勢力の動向を中心に－」『神奈川地域史研究』18
高橋浩明　2000「古代国家の地方行政」『神奈川地域史研究』18
鳥羽政之　2000「千代遺跡と武蔵国榛沢郡家」『神奈川地域史研究』18
冨永樹之　2000「神奈川県」『古代仏教系遺物集成・関東－考古学の新たなる開拓をめざして－』考古学から古代を考える会
永井　肇　2000「千代木簡と国府・郡家」『神奈川地域史研究』18
中村哲也　2000「茅ケ崎市香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』
中村哲也　2000「香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区北Ｂ地点」『第11回茅ケ崎市遺跡調査発表会』
中村哲也・大村浩司　2000「神奈川・香川・下寺尾遺跡群（下寺尾地区北Ｂ地点）」『木簡研究』22
根本誠二　2000「相模の古代寺院と仏教者」相模原市博物館　講演資料
日野一郎　1967「平塚市下ノ郷廃寺跡」『日本考古学年報』15
望月一樹　2000「新資料発見！『評』の文字瓦」『museum news』56　川崎市市民ミュージアム
飯泉山勝福寺　1981『飯泉観音開帳大法会』
海老名市　2000『海老名市史 1 資料編　原始・古代』
小田原市教育委員会　2000「最新出土品展2000　弥生時代の小田原」リーフレット
神奈川地域史研究会　2000「特集　シンポジウム木簡が照らす古代の小田原」『神奈川地域史研究』18
川崎市教育委員会　2000「『无射志国荏原評』銘の文字瓦」『教育だよりかわさき』60
建築史研究会　1942「足立博士追悼号」『建築史』4-2
考古学から古代を考える会　2000『古代仏教系遺物集成・関東－考古学の新たなる開拓をめざして－』
茅ケ崎市教育委員会・下寺尾寺院跡研究会・文化資料館と活動する会考古部会　2000「下寺尾寺院跡の礎石」リーフレット
平塚市　2000『平塚市内出土の古瓦』平塚市史別編考古基礎資料集成1（小林健司）
富士市教育委員会　2000「静岡・富士市・東平遺跡」『文化財発掘調査情報』221（9月号）
武相学園考古学部　1962「平塚市下ノ郷廃寺跡の発掘」『武相文化』155
武相学園考古学部　1963「平塚市北ノ郷古代寺院跡」『考古学部活動報告書』3

第１表　神奈川県古代寺院一覧

	国分寺	国分尼寺	影向寺	弘明寺	宗元寺	深田	千葉地	下寺尾	四之宮	吹切	千代
郡・郷	高座高座	高座高座	橘樹橘樹	久良	御浦御浦	田津	鎌倉鎌倉	高座寒川	大住前取	余綾余綾	足下高田
伽藍地規模 伽藍中枢部	2町×3町 124×159m	77×96m	90×70m					100×50m			2町×2町 100×100m
伽藍様式 (異説)	法隆寺式	国分寺式	法起寺式		法起寺式か 法隆寺式 四天王寺式(河野)			法起寺式か 法隆寺式			法隆寺式 東大寺式 (石野他)
創建期 再建期 修復期	8世紀Ⅲ 9世紀Ⅱ 9世紀Ⅳ	8Ⅲ 9Ⅱ 9Ⅳ	7Ⅳ 8前半	7Ⅳ～8初 8後半	7Ⅳ 8後半	8Ⅰ 8後半	7Ⅳ～8初 8後半	7Ⅳ 9前半	9Ⅲ	8Ⅰ 8Ⅳ～9前半	8Ⅰ 8Ⅳ～9前半
7世紀Ⅱ Ⅲ Ⅳ 8世紀Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ 9世紀Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ 10世紀	創建 再建 補修	創建 再建 補修 ＋	創建 修復	創建 修復	創建 修復 修復	創建 修復	創建 修復	創建 修復 廃絶	創建	創建 修復	創建 修復 廃絶
瓦　窯	からさわ 乗越 公郷 不明 瓦尾根 南多摩		不明	不明	下寺尾型 石井 法塔 乗越 公郷	法塔 乗越	下寺尾 石井 法塔 からさわ 乗越 不明	下寺尾型 不明 瓦尾根	からさわ？ 瓦尾根 郡窯？	法塔 からさわ 不明	からさわ 不明
鬼瓦	○	○			○	○					○
軒丸瓦 (鐙瓦)	珠5単蓮 珠6単蓮	珠8単蓮 珠6単蓮	素8単蓮		忍冬蓮華 剣菱蓮華 珠8単蓮	6素蓮 8素蓮	三6素蓮		珠6単蓮		三16複蓮 三16細蓮 珠8単蓮 珠8複蓮 6単蓮
軒平瓦 (宇瓦)	均正唐草文	扁行唐草文 均正唐草文	重弧文		重弧文 飛雲文	重弧文			飛雲文 均正唐草文		重弧文 飛雲文 葡萄唐草文
丸瓦 (男瓦)	有段 無段	有段 無段	無段	無段	無段	無段	無段	有段 無段	無段	無段	無段
平瓦(模骨) (女瓦)	格子目	格子目	凸面布目 格子目	＋ 格子目	下寺尾型 縄目 ナデ	ナデ	下寺尾型 縄目 ナデ 格子目	下寺尾型 縄目 ナデ(縄)	＋ 格子目	縄目 ナデ 格子目	格子目
平瓦(一枚) (女瓦)	縄目	縄目	縄目 格子目	縄目	縄目 板目 縄＋板	縄目	縄目	縄目 板目 板＋板	縄目 格子目	縄目	縄目
創建豪族 (河野説)					少領鹿島臣 郡司代太田部直		少領他田氏 郡司代君子氏	壬生直	壬生直	漆部直	漆部直
豪族居宅地			下層建物					西方C遺跡			
7世紀古墳			馬絹古墳					石神古墳		釜口古墳	
郡　衙			千年伊勢山台北遺跡				今小路西遺跡	隣接地？	隣接地	国府本郷遺跡	下曽我遺跡
関係　上野 寺院　大和			上植木廃寺 山田寺		西安寺						
中央勢力					山形女王			秦氏			

寺院地の範囲
（須田勉１９９８）

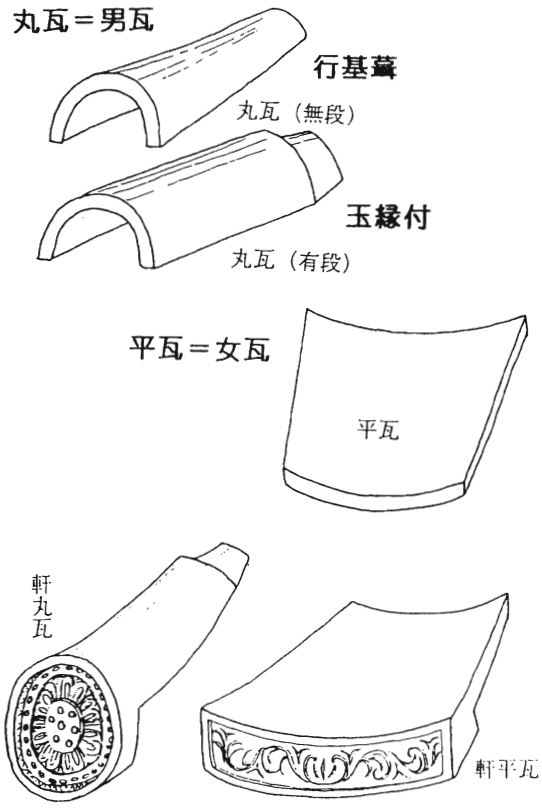


赤星直忠氏作成
宗元寺復元図

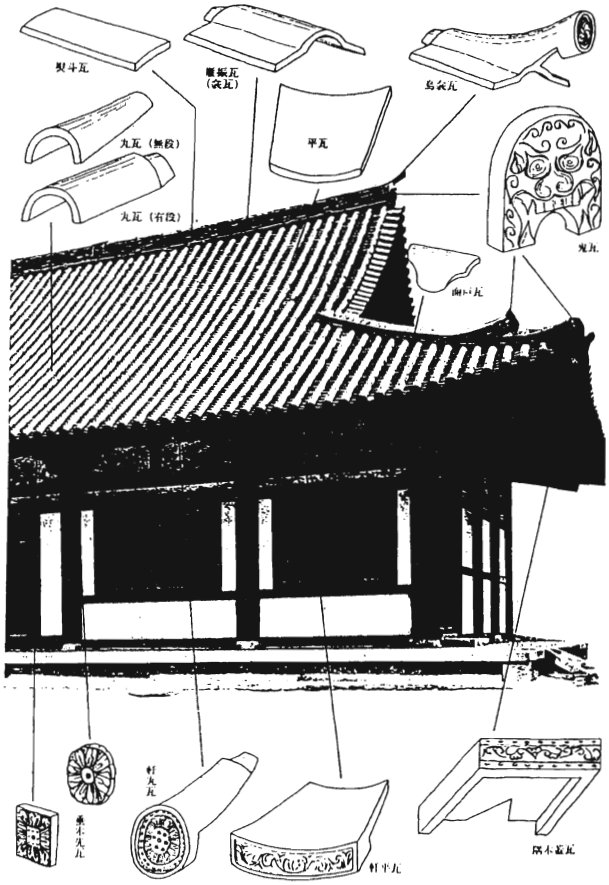
伽藍中枢部（中門・回廊・塔・金堂・講堂）＜ 伽藍地（南大門・僧坊・区画溝など）＜ 寺院地（付属施設など）

寺域（狭義）＝伽藍地
寺域（広義）＝寺院地

瓦の名称と位置



軒丸瓦＝鐙瓦　　軒平瓦＝宇瓦



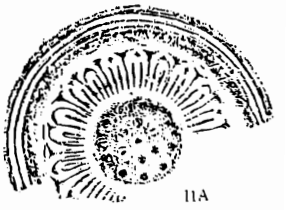
上原真人１９９７『瓦を読む』

軒丸瓦（鐙瓦）の名称

（Ⅰ類）

忍冬蓮華文軒丸瓦

６葉素弁蓮華文
（６素蓮）深田



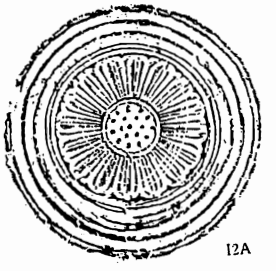
I1A

三重圏16葉複弁蓮華文
（三16複蓮）　千代

素縁８葉単弁蓮華文
（素８単蓮）影向寺

忍冬交飾蓮華文
（忍冬蓮華）宗元寺

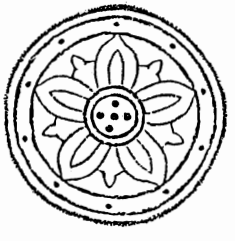
８葉素弁蓮華文
（８素蓮）深田



I2A

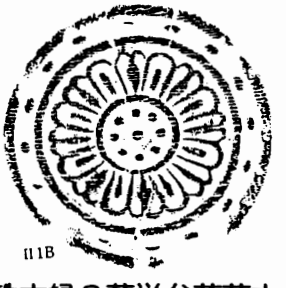
三重圏16葉細弁蓮華文
（三16細蓮）　千代

珠文縁８葉単弁蓮華文
（珠８単蓮）国分尼寺



珠文縁５葉単弁蓮華文
（珠５単蓮）　国分寺

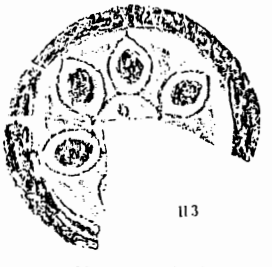
三重圏６葉素弁蓮華文
（三６素蓮）千葉地東



II1B

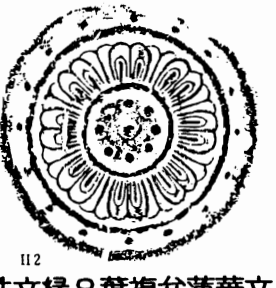
珠文縁８葉単弁蓮華文
（珠８単蓮）　千代

珠文縁６葉単弁蓮華文
（珠６単蓮）国分二寺



II3

６葉単弁蓮華文
（６単蓮）千代

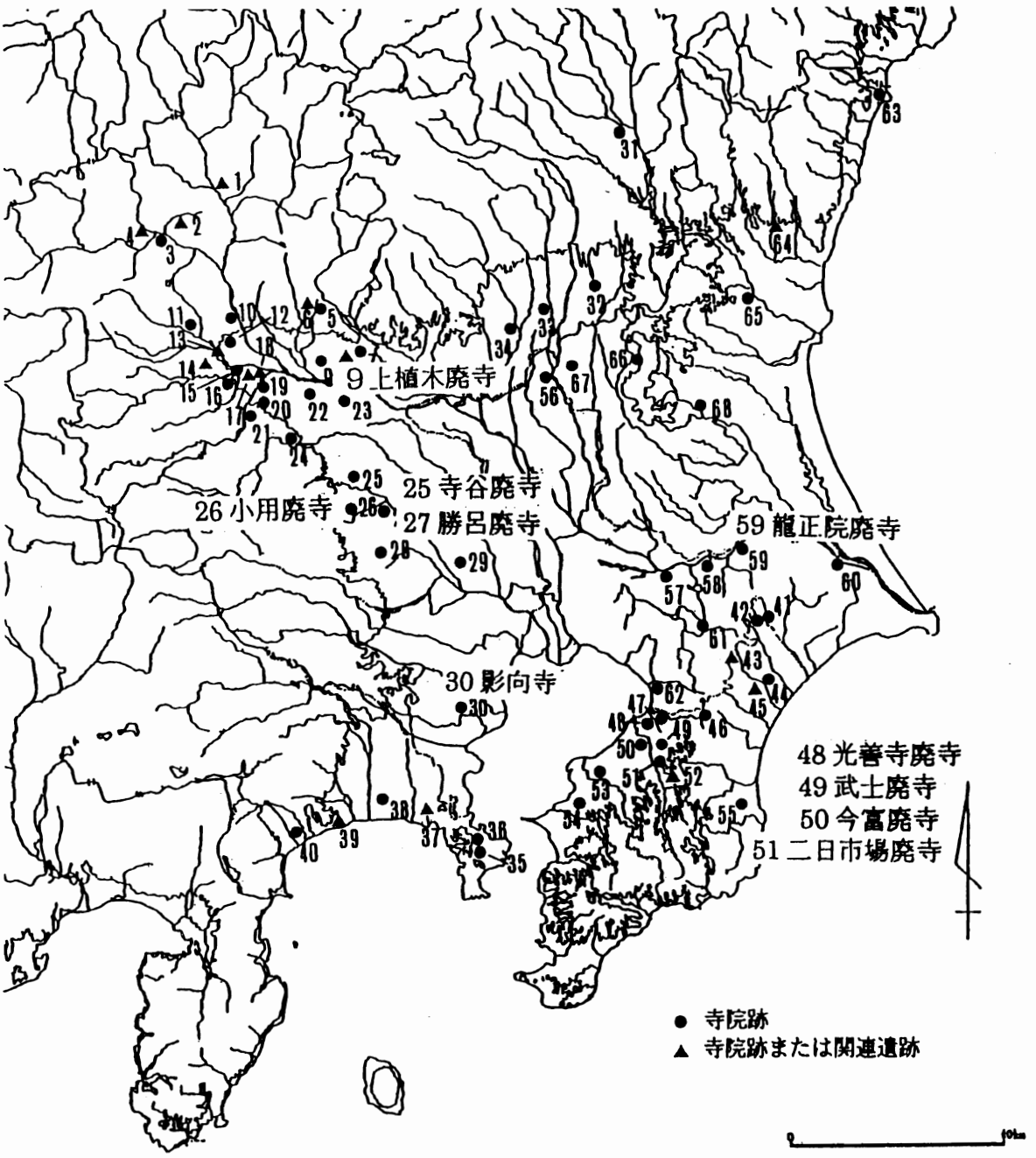


II2

珠文縁８葉複弁蓮華文
（珠８複蓮）　千代

関東の初期寺院等分布図

（関東古瓦研究会１９９７）



1 後田遺跡　2 平遺跡　3 金井廃寺　4 在上遺跡　5 新宮廃寺　6 間野谷遺跡　7 寺井廃寺　8 入谷遺跡
9 上植木廃寺　10 山王廃寺　11 奥原廃寺　12 新保廃寺　13 護国神社遺跡　14 桑原峰遺跡　15 田端廃寺
16 馬庭東廃寺　17 水窪遺跡　18 山王窪遺跡　19 五明廃寺　20 城戸野廃寺　21 皂樹原廃寺　22 岡廃寺
23 西別府廃寺　24 馬騎の内廃寺　25 寺谷廃寺　26 小用廃寺　27 勝呂廃寺　28 女影廃寺　29 大久保領家廃寺
30 影向寺　31 浄法寺廃寺　32 大内廃寺　33 下野薬師寺　34 大房地廃寺　35 宗元寺　36 深田廃寺
37 千葉地遺跡　38 下寺尾廃寺　39 吹切遺跡　40 千代廃寺　41 小金台廃寺　42 山田廃寺　43 埴谷横宿遺跡
44 真行寺廃寺　45 湯坂遺跡　46 大椎廃寺　47 菊間廃寺　48 光善寺廃寺　49 武士廃寺　50 今富廃寺
51 二日市場廃寺　52 奉免上原台遺跡　53 大寺廃寺　54 九十九坊廃寺　55 岩熊廃寺　56 結城廃寺
57 木下別所廃寺　58 龍角寺　59 龍正院廃寺　60 木内廃寺　61 長熊廃寺　62 千葉寺廃寺　63 大津廃寺
64 長者屋敷遺跡　65 台渡廃寺　66 山尾権現山廃寺　67 新治廃寺　68 茨城廃寺

神奈川県古代瓦出土遺跡目録　補

（1）出土遺跡の追加と訂正

横浜市古代瓦出土遺跡一覧（追加）

No.	所在地・遺跡名	郡	遺跡	瓦の種類など	文献
10	緑区三保東谷	都筑		布目瓦	岡本勇 1994

岡本　勇　1994「考古」『横浜の文化財－横浜市文化財総合調査概報（12）』横浜市教育委員会社会教育部文化財課
岡本　勇　1994「横浜市内遺跡の分布調査一覧」『同上』

海老名市古代瓦出土遺跡一覧（訂正）

No.	所在地・遺跡名	郡	遺跡	瓦の種類など	文献
9	大松原遺跡	高座	集落	縄目平瓦	10・14

平塚市古代瓦出土遺跡一覧（追加）

No.	所在地・遺跡名	郡	遺跡	瓦の種類など	文献
25	御殿Ｄ遺跡			削除（近世瓦）	
29	平塚城跡	大住	集落	縄目平瓦	平塚市教育委員会 1991
30	新町遺跡	大住	集落	縄目平瓦	文献 46・若林 1994
31	稲荷前Ｂ遺跡	大住	国府域	縄目平瓦、格子目平瓦	平塚市教育委員会 1997
32	竹之内遺跡	大住	集落	平瓦	真田・北金目地区 1982
33	諏訪町Ｃ遺跡	大住	集落	平瓦	諏訪町Ｃ遺跡遺跡 1997
34	王子ノ台遺跡	大住	集落	瓦	東海大学 1999

平塚市教育委員会　1991『平塚市埋蔵文化財シリーズ』18
平塚市教育委員会　1997『平塚市埋蔵文化財シリーズ』30
真田・北金目地区遺跡発掘調査団　1982『平塚市真田北金目地区遺跡確認調査概要』
諏訪町Ｃ遺跡発掘調査団　1997『諏訪町Ｃ遺跡発掘調査報告書』
東海大学　1999『王子ノ台遺跡』Ⅲ
＊『平塚市古瓦資料集成』2000 を参照のこと

小田原市古代瓦出土遺跡一覧（追加）

No.	所在地・遺跡名	郡	遺跡	瓦の種類など	文献
9	永塚下り畑	足下	集落	瓦	杉山 1989
10	永塚一町畑	足下	集落	縄目瓦、格子目瓦	塚田 1986
11	千代・茶屋川	足下		瓦	古宮 1980
12	高田戸之市	足下	集落	平瓦	内田武 1976

13	高田西原	足下	集落	平瓦	内田武 1976
14	高田室田	足下	集落	平瓦	内田武 1976
15	別堀十二天	足下	集落	格子目平瓦	内田盛 1979
16	酒匂２丁目 （大見寺・上輩寺境内）	足下		縄目瓦	川瀬 1978

内田武雄　1976『相模初期の国府国分寺を探る』
内田盛雄　1979『高田別堀の郷土史』
川瀬速雄　1978「酒匂石器土器収集報告及び古代の酒匂考察」『小田原史談』87
古宮万寿夫　1980「千代国府考」『小田原史談』101
杉山博久　1989「永塚下り畑遺跡第Ⅱ地点発掘調査報告書」『小田原市文化財調査報告書』26
塚田順正　1986「永塚一町畑遺跡の調査」『小田原市文化財調査報告書』21

（２）文献の追加遺跡

市	No.	所在地・遺跡名	文献
横浜市	1	南区弘明寺	岡本勇 1978、岡本他 1978
川崎市	8	多摩区菅寺尾台塚廃堂跡	前場 1984
	9	麻生区岡上廃堂跡	前場 1984
横須賀市	2	深田廃寺跡	前場 1984
藤沢市	1	宮前・固館遺跡	前場 1984
海老名市	4	上浜田遺跡	前場 1984
厚木市	1	恩名片岸遺跡	前場 1984、宮田他 1998、厚木市教育委員会 1998
平塚市	1	四之宮廃寺跡	前場 1984、平塚市博物館 1998
	2		青地 1999
	3		平塚市博物館 1998
	10		平塚市博物館 1998
	11	山王Ｂ遺跡	前場 1984
小田原市	4	千代 192 番地	前場 1984

岡本　勇　1978「考古資料」『横浜の文化財　－横浜市文化財総合調査概報（２）－』 横浜市文化財現況調査団
岡本　勇・小川裕久・佐藤安平　1978「考古資料」『横浜の文化財－横浜市文化財総合調査概報（２）』 横浜市文化財現況調査団
前場幸治　1984『国分寺古瓦拓本集　巻一　相模編』
宮田　真・森　孝子・諸星真澄　1998『厚木市恩名片岸遺跡発掘調査報告書』
厚木市教育委員会　1998『南毛利の遺跡展』（遺跡No. 1）
平塚市博物館　1998『相模国府とその世界』（遺跡No. 1, 3, 10）
青地俊朗　1999「高林寺遺跡第 12 地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ』33(遺跡No. 2)

影向寺址をめぐる問題

河合　英夫

はじめに

早春の講座では、昭和50年代に実施された影向寺址の発掘調査の見解をもとに、その成果と問題点について述べた。報告では伽藍配置の問題と、影向寺の創建問題に関連して、伽藍内で発見された建物群を「影向寺下層建物群」として取り上げた。また関連資料として、寺院と郡衙関連施設が併存する事例として隣接地で検出された橘樹郡衙との関連を紹介し、創建の背景や郡衙との関連性を述べた。その後、影向寺出土瓦の中に「无射志国荏原評」と記された文字瓦や橘樹郡衙正倉群発見の報道がなされるなど、注目される資料が相次いで発見されている。また当日の報告後には、村田文夫氏から貴重なコメントをいただいた。まさに影向寺址の研究は今回の講座が出発点といえる。意を尽くせなかった部分もあるが、村田氏のコメントや新資料を含めて若干の所見を述べたい。

1　伽藍配置について

現薬師堂下を講堂とみなし、塔を東に、金堂を西に配した法起寺式伽藍を想定したが、金堂の痕跡は現状では確認されていない。この問題に村田氏は、後世に金堂基壇が残らず削平されてしまったことに疑問を感じている。金堂推定地の確認を必要とするが、塔心礎も原位置からは完全に動いており、時代の変革期には前代のものを完全に否定する風潮はどこでもみられる。現薬師堂下の調査状況を考えると、その掘込地業は国分僧寺の金堂規模に匹敵し、また間口が広いことも三間四面の形式が一般的とされる白鳳期の金堂とは趣を異にしており、金堂基壇と見做すよりは、むしろ間口との関係からみて奇数間の講堂であった可能性が高い。現在、金堂の推定地はだいぶ低くなっているが、塔址の基壇状況をみると、掘込地業は残っている可能性がある。

2　影向寺出土の文字瓦について

文字瓦は薬師堂西の１号掘立柱建物址の柱受けに再利用されていた平瓦に「无射志国荏原評」と箆で記された資料である。荏原評の評という文字は大宝律令施行以前の地方行政組織の表記法であることと、国評銘を併記する表記方法は天武12年(683) 以降とされることから、瓦の製作年代も７世紀第Ⅳ四半期に収まるものとなり、造瓦技術の追求や創建年代の追認資料ともなる。また評制が施行されていることの証明でもあり、郡衙正倉との関連では創設期の年代を決める参考ともなろう。

文字瓦の評価については十分な検討を必要とするが、荏原評の役人からの寄進瓦ともされているが、国評名が記載されているのは何故なのか、また行政組織としての他の評からの寄進とも考えられるが、とすれば、瓦の供給先は氏寺レベルとは考え難くなる。関連して、報告書の中には「都」と判読できる文字瓦も含まれており、都筑評からの寄進の可能性もある。数評からの供給体制は氏寺レベルを超えるもので、その検討も重要な課題であり、国分寺段階の供給体制との比較検討による成果も期待できよう。

平成８年度の千年伊勢山台北遺跡の成果に加え、昨年まで判明した総柱建物を中心とする掘立柱建物は17棟を数える。郡庁、舘、厨家などの中枢部は発見されていないが、建物配置や遺構間との重複関係などから推測して、現状では３時期（Ⅰ～Ⅲ期）に区分できる。

Ⅰ期　台地の南側に造営され、総柱建物３棟で構成される。主軸方位は南北に対して東に60度振れる。規模は桁行・梁行とも３間で、一辺6.00ｍ（20尺…１尺30㎝換算）、構造的には「布堀」工法の１号→「一部布堀」の２号→「坪堀」の３号という変遷が推測されるが、３棟はそれぞれ柱筋を揃え、２号と３号は直列に配置されていることから、最終的には併存していたと考えるべきであろう。建物配置に四方の規制がみられない点は、影向寺址の「下層建物群」と共通している。創設期の正倉と考えたい。

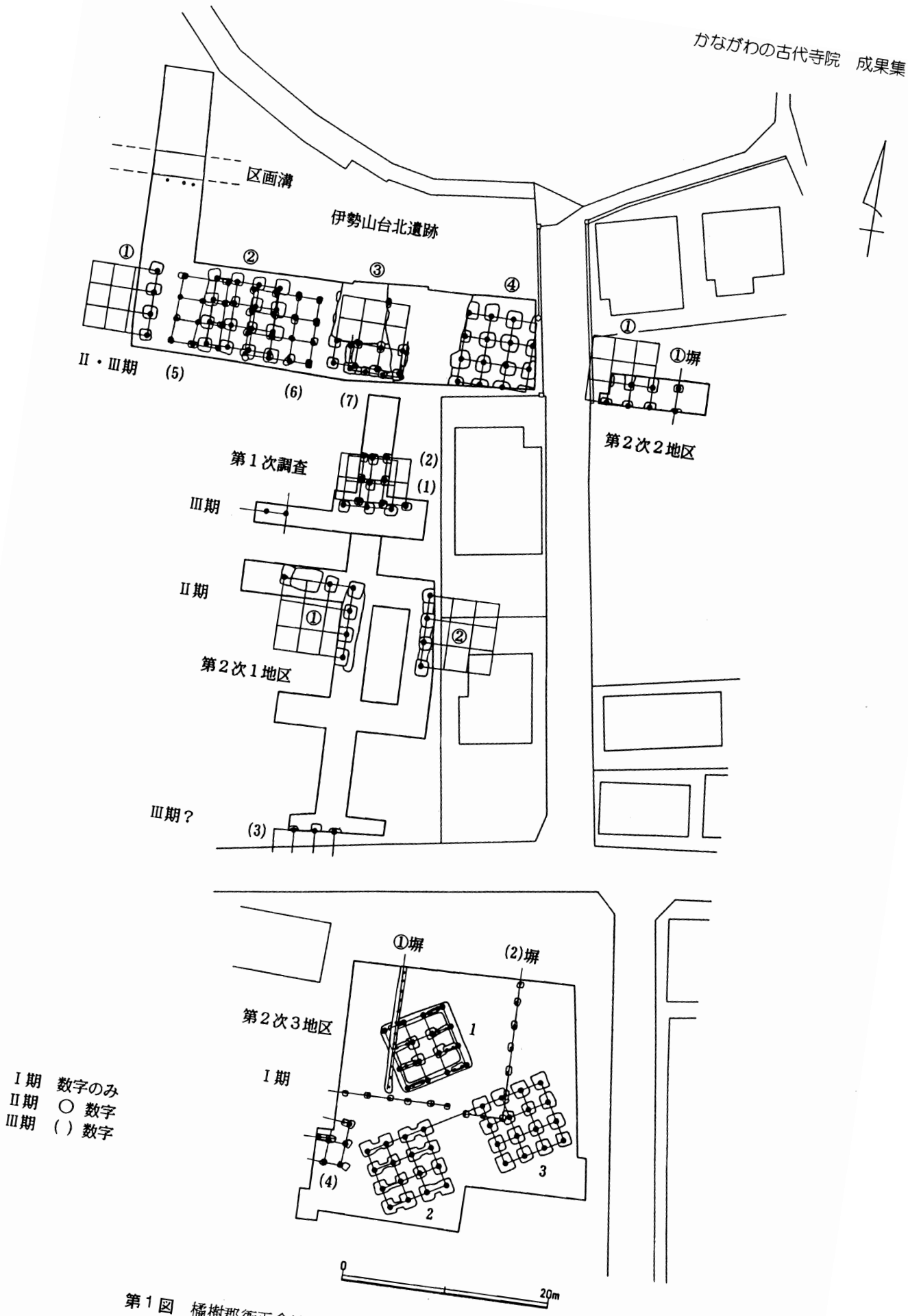
Ⅱ期　台地の北側を中心に造営され、現在までに７棟の総柱建物を検出し、最も計画的な配置を示す。建物は東西に５棟が並び、直列並行に配置される。桁行・梁行とも３間で、北列の建物は各面6.30ｍ～6.75ｍ（21～22.5尺）、南列の建物は6.75ｍ（22.5尺）。構造的には坪堀であるが、南列の２棟は布堀から坪堀に改修されており、南列から北列への変遷が推測される。Ⅱ期は高い計画性と整備状況および出土遺物により８世紀前半から中頃の所産と考えられる。

Ⅲ期　Ⅱ期の位置をほぼ踏襲し、倉庫群の配列を維持しようとする意図はうかがえるが、桁行２間の総柱建物や側柱建物が混在するなど、建物は相対的に小形化し、正倉域の規模も小さくなる。Ⅱ期との重複によって８世紀後半以降と推測されるが、当該期の蓮乗院北遺跡でも同規模の総柱建物が発見され、出雲風土記にみられる正倉（郷倉）の分置は実態として存在した可能性がある。

以上、足早に述べてきたが、創設期が７世紀の第㈹四半期まで遡るものとなれば、大宝令施行以前の評制段階の地方統治に関する考古資料が新たに加わったことになる。先の影向寺出土の文字瓦「无射志国荏原評」の評価とも関わり、影向寺との関連性が一層高まったものと考えられる。

おわりに

寺院成立に関わる重要な手がかりとして瓦当文様の型式学的研究があるが、評銘記の文字瓦の出土で瓦の製作年代も７世紀代まで遡ることが確実となり、更なる造瓦技術の追求や「影向寺下層建物群」の評価が今後の重要な課題となってきた。また郡衙成立過程の問題、つまり立評の成立時期をめぐる問題とも関係しており、今後論議を呼ぶものと考えられる。隣接地の橘樹郡衙正倉域の調査では時期を示す明確な遺物が出土していないことから十分な判断ができなかったが、国評銘併記の資料によって天武朝から持統朝に至る頃（７世紀代第Ⅳ四半期）の評・評衙の段階に相当する時期を含むものと推測される。正倉Ⅰ期とした倉庫群がそれで、８世紀代へと連続的に移行していると推測されるが、後者とは配置や構造が大きく変化しており、存続期間も比較的短い印象を受ける。しかし倉庫群としての立地は踏襲している。いずれにせよ「无射志国荏原評」銘の文字瓦の出土は、影向寺の形成過程の問題だけではなく、郡制に先行する評段階をめぐる問題や、その官衙施設について言及できる資料であり、また地方支配の発展段階を考える上でも貴重な発見といえる。伽藍配置の問題とともに考えて行きたい。



第１図　橘樹郡衙正倉域平面プラン検出状況図［1:500］

影向寺址に関する発表へのコメント

村田　文夫

「川崎市影向寺址」と題する河合英夫氏の発表（以下は「河合発表」とする）に対するコメントを実行委員会から求められた。若干の感想を込めて当日会場で述べた卑見をまとめさせていただく。

河合発表は総合調査（昭和52～55年度）や現薬師堂の半解体工事にともなう発掘調査（昭和62・63年度）成果を十分に咀嚼しており、概ね妥当な見解と理解しているが、なお異見がなくはない。

1

まず伽藍配置については、塔と金堂が対置し、講堂がその両者の中間背後に建つ法起寺式を想定された。これは影向寺の伽藍配置について触れた最初の見解である。影向寺の場合、塔心礎にあたる影向石の存在から塔址の確認は視覚的にも容易である。実際、総合調査の折り、現影向石の北側から堅固に版築された40尺（12m）四方の掘り込み基壇が発掘された。その結果をもとに金堂址を確認するため、建築史の泰斗の指導も得ながら境内諸所に試掘溝（トレンチ）を入れた。遺憾ながら金堂址の痕跡が確認できず、報告書では消去法的に現薬師堂下に眠る可能性を指摘するにとどまった。

その後に現薬師堂の半解体工事が事案として浮上してきた。総合調査の経緯も踏まえ、薬師堂下を試掘できる機会を狙っていた。それが実現し、期待どおり堅固な版築基壇が確認できた。その平面的な範囲は、現薬師堂の基壇部とほぼ同じくしていた。しかし、現薬師堂を支えている基壇部への影響を配慮して調査範囲は必要最小限に抑えた。また顕著な遺物の発見もなかった。

総合調査からの経緯（思い入れ！）もあって、半解体工事にともなう発掘報告書では、私も含めてこれを躊躇することなく推定・金堂址にあたるものと理解した。結論の当否は別にして、今にして思えば調査関係者間での討議が十分でなかった点の反省は残る。そこにこのたびの河合発表があったわけで、正直若干虚を突かれた感がしないでもない。

まず河合発表と関連して確認したいのは、東・西に対置する塔と金堂の標高に起因する事実確認についてである。当然、東・西に対置していたとしたら相近似した高さ（レベル）に建てられたと考えられる。しかるに現影向石周辺の標高は、42.7～43.0m前後であるが、法起寺式説に拠って河合氏が金堂址を推定した位置は、すでに削平されて41m前後であり、塔址とは2m前後の差がある。絶望的とはいわぬが2m前後の比高差は、課題の遺構存否の作業を強く拒絶しているに等しかろう。加えて、現山門前を東西に走る公道は、河合氏が推定する金堂址のところから北西側に120度曲がっている。仮にこの位置に金堂址が位置していてもその時点で遺構は削平された可能性がある。考古学の宿命として、事実の確認ができないかぎり、解釈は推測などの域に止まざるを得ないのである。

影向寺は古代からの法燈をおそらく絶やすことなく、今に伝えてきた。その希有な歴史的背景を思慮すれば、堅固な版築層をもち、巨大な礎石を据えていたと思われる金堂址の存在が危うくなれば、その

時点で何らかの伝承や記録類が残らないであろうか。祖先から伝承した象徴的な記念物一切を簡単に記憶の外に追いやってしまうであろうか、と極めて常識的な解釈論を承知で反駁させていただく。

では、法起寺式でなければ如何なる伽藍形式を、と問われると返答に窮する。が、現薬師堂下に位置する建物の規模や時期などが十分分明でなかったにも拘かわらず、現薬師堂下を金堂址と推定した自戒を込めていえば、究極的には可能であれば河合氏が推定する箇所を発掘調査するなどして遺構・遺物の有無を考古学的に確かめる方法が最良であろう。その結果をみて、また思考すればよい。

2

影向寺の創建期・改修期に関するコメントであるが、まず影向寺には供給した瓦を操業した窯址は近隣では確認されていない点を留意しておきたい。つぎにまた各地の国分寺・郡寺クラスの寺院からしばしば発掘される、寺院創建に先行する可能性をもつ建物群〔下層建物群〕が影向寺からも発掘されているが、それに関する史的評価は私もすでに何回か指摘してきたところである。また創建の時期は、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ類から７世紀第４四半期、最初の改修は軒丸瓦Ⅲ類から８世紀前半期とし、総合調査の報告書に記された原広志氏の主張を10～20年前後遡らせている。しかし絶対的な関連資料が追認されていないかぎり、なおこの点については慎重であるべきであろう。

河合発表では触れられていないが、影向寺境内からは「都」銘の文字瓦が発見され、従前より注目されてきた。武蔵国分寺からも「都」銘瓦は発見されているが、相互を比較すると書風は類似し、工人達の識字程度を反映してか書順の不統一や誤字と思われる部分まで類似する。個々の文字瓦から年代を特定することは容易でないが、私はこれらの酷似性を重視し、８世紀中葉頃に寄進が集中したとされる武蔵国分寺の文字瓦のうち、「都」銘瓦との時間的関連は十分にあり得ると考えている。

ちなみにこれまで影向寺の「都」銘瓦は、隣接する都筑郡領からの寄進瓦－－当然、受ける側も橘樹郡領クラス－－と理解されてきた。仮に寄進瓦であれば、影向寺を橘樹郡の郡寺〔橘樹寺〕として認知していればこそであろう。

3

私は影向寺自体の歴史的解明もさることながら、周辺地との関連性に重大な関心をはらいたい。

まず馬絹古墳との関連であるが、天平尺で構築した巨大な横穴式石室、泥岩切石の目地や玄室最奥壁部の１枚の大きな鏡石に施した白色粘土など、畿内の終末期石室に共通する因子は無視できない。私は馬絹古墳の構築は７世紀第４四半期頃まで降る可能性を考えているので、影向寺は馬絹古墳を含む梶ケ谷古墳群の被葬者に直結する後裔が氏寺として建立に関わった可能性があり得るとみる。つまの影向寺は、それまでの地縁・血縁を原理に地域を支配した譜代氏族が新規のイデオロギーで建立した寺院で、宗教性の保持を意図し、象縁を原理にした新時代への忠誠を誓った記念物とすることができる。

一方、矢上川から有馬川に挟まれた野川・有馬・馬絹地域では、台地縁辺から斜面交換点にかけて薬壷形須恵器や甕形土師器を容器にした火葬骨蔵器が多数発見されている。時期的には須恵器製が８世紀

代であるが、土師器製の多くは9世紀後半代である。被葬者としては、随伴する遺物や火葬骨の形質人類学的な分析から、私は国府派遣の官僚クラスとか韓半島から入植した吉志氏などの渡来氏族を想定し、影向寺の位置する通称影向寺台が、譜代氏族によって代々支配されていた様相とは異なる地域相を描いている。換言すれば、火葬という少なからず仏教的影響を受けながらも、一方では新興の寺院支配とは一線を画したテリトリーを形成していたものと推量している。

最近、通称影向寺台の一角の千年伊勢山台遺跡から、堅固な構造が復原できる総柱の掘立柱建物址群が整然と発掘され、それが橘樹郡衙の正倉址と推定されている。現在も調査中であり、今後、郡庁・厨・館などの発掘が大いに期待される。影向寺が「都」銘瓦の存在から、前に述べたように8世紀中葉以降郡寺としての機能していたとなれば、通称影向寺台には郡寺・郡衙が併置された状況が復原できる。これからは郡寺・郡衙相互の細かな時間的展開のあとづけが当面の課題となる。

通称影向寺台の歴史がここまで解明されてくれば、さらに周辺に眼を光らす必要がある。

まず、影向寺〔郡寺〕と千年伊勢山台遺跡〔郡衙〕が位置する中間地域からは、当然寺院や郡衙に関連する遺構・遺物の発見が期待される。これまでこれに関連する明確な遺構・遺物類の発見は報告されていないが、今後意識をもって調査をすれば、関連資料の発見は大いに期待できる。幸い周辺の地域はまだ畑地として耕作されている。

また影向寺の南方、約180mには野川神明社が位置する。同社には、近世初頭の慶長18年（1613）銘の棟札が現存する。それには「領家方」「地頭方」の文字があり、中世における下地中分の事実を伝える。領家方は影向寺側に“領家谷”があり、地頭に関しては有馬川側に伝承する家があることから、両者の位置関係は明瞭である。さしづめ領家方は高塚古墳を築いた保守的な基盤を、一方の地頭方は新来の開拓者の基盤を継承したものか。悠久なる歴史的な脈絡を確認しているかのようである。さらにいえば、野川神明社は領家方の鎮守社であったわけであるが、私はその創建の時期が律令期にまで遡り国府の総社のように、郡寺・郡衙と三点のセットであった可能性もひそかに考えている。

野川神明社境内の遺跡調査に期待をかける所以である。

4

考古学講座（平成12年3月5日）の直後、影向寺から新たに確認された文字瓦の発表が川崎市教育委員会からあった。問題の文字瓦は総合調査の折り、薬師堂西側の第4号掘立柱建物址の6号掘り方内の底部に据えられていた。瓦に関する調査関係者から正式な報告はいまだにないが、影向寺に関わる重大な発見であるので、新聞発表された内容の範囲で若干のコメントを追加させていただく。

瓦は縦31.4cm・横23.8cmの女瓦（平瓦）で狭端部にかけて1／3を欠損する（写真1）。文字は箆書きで凸面中央部に「无射志国荏原評」とある。当初、荏原評の荏にクサカンムリが確認しにくく任と判読したが、子細に観察すると逆三角形状に一筆で流れる流麗な刻みがあり、これがクサカンムリと判断できるので、荏原評と書かれたとすることができる。荏原評に続く文字があるかどうかであるが、瓦上端から最初の文字の「无」までの間隔と、「評」と瓦下端までの間隔を較べてみるとほぼ同じ程度なの

で、「評」の文字が最後ではなかろうか。つまり、１行にして書かれた文字であろう。

この資料は考古学的な遺構・遺物にもとづく解釈と、箆書きされた文字の歴史的背景を分けて考える必要があり、まずは考古学的な解釈から入るべきであろう。

第一に発見された第４号掘立柱建物址の時期であるが、私は８世紀中葉前後と考えている。影向寺の境内からはこれまで数棟の掘立柱建物址が発掘されているが、それらは（１）掘り方内から遺物の発見がなく、棟方位も東西軸からズレる建物。７世紀第４四半期、（２）掘り方内から遺物の発見はないが、棟方位は東西軸に近い建物。７世紀末～８世紀初頭、（３）掘り方内から遺物の発見があり、棟方位は東西軸に近い建物。８世紀中葉前後、に概ね分類している。第４号掘立柱建物址は、まさしく（３）にあたる。

一方、瓦の製作時期は、箆書き内容から概ねの推測は可能である。まず地方行政組織としての荏原評の表記から、大宝律令（701年）以前の製作であることが分かる。また、国・評名を併記する記述方法は、現在の研究では天武天皇12年（683）以降とされている。二つの年代的指針から７世紀第４四半期から８世紀初頭のなかでも限定された時間幅が特定できる。ただし、考古学的な関連性では謎が多い。

まず、極めて流麗な筆遣いならぬ“箆遣い”で書かれた隣接の評名瓦が、どのような意図・目的で橘樹評（郡）内の影向寺に運び込まれたのか、その解明がある。次に影向寺に運び込まれた時期については、製作年代に近かったのか、あるいは一定の時間を挟んでのことであったのか。さらに、その瓦が８世紀中葉前後の掘立柱建物址から発見されたわけであるが、ではそれまでの期間、瓦はどのように管理されていたのであろうか。これらの課題は、畢竟、瓦の持ち込まれた意図・目的が税であったか、知識であったかにほぼ収斂できる。また第４号掘立柱建物址の全容は不明だが、規模的には通常のようである。８世紀中葉には文字瓦がもつ歴史的経緯が無に帰され、単に柱受けに二次的転用されたものか、それとも特別の建物であったのであろうか。

私は１枚の女瓦のほぼ中央に「无射志国荏原評」と書かれた７文字の瓦と、同じ影向寺から発見されている「都」１字銘の瓦を、文字瓦の名で単純に括ることはできないと考えている。何より前者は「国・評」を併記した記述法で製作時期もほぼ特定できるのに対し、後者の場合は流動的で、私は前述どおり半世紀ズレた８世紀中葉前後を想定している。また前者は、通常の寺院址から発掘される文字瓦類に比して流麗な“箆遣い”であり、それ自体十分に驚愕させられる。

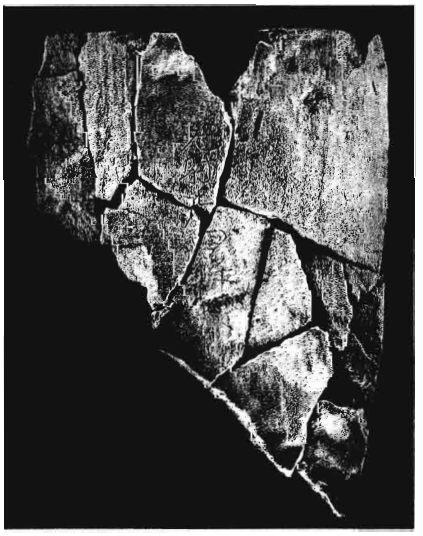


写真１　「无射志国荏原評」銘の文字瓦
（撮影・提供　小池　汪氏）

いずれにしろ、「无射志国荏原評」銘瓦は、多摩川下流域における評制の確実な施行を証明するなど古代史上の意義は勿論大きい。その半面、瓦自体は容易に移動しうる遺物であるから、終始思い入れを避けた解釈に徹底すべきであ

る。当然、調査が進行中の橘樹郡衙（千年伊勢山台遺跡）との関連性が今後大きな問題として浮上してくるが、これについても極力慎重でありたい。ただ前述した影向寺境内発掘の掘立柱建物址のうち、（1）に分類した第1号掘立柱建物址の主軸は南北に対して西に約31～32度前後振れているが、橘樹郡衙の第1期正倉群も同じ程度軸線が振れている。相互の時間的な序列はさらに細かく検証していくにしても、関連性が視野になければこうした符号性はあり得なかろう。しかし文字瓦に関する考古学は、8世紀中葉前後の建てられた第4号掘立柱建物址の掘り方底面に敷かれていた複数の瓦のなかの1枚であるという厳然たる事実、全ての思考は「遺跡学」に即してこの解明から始まるのである。

文献

三輪修三　1979「中世野川郷の『領家』と『地頭』」『川崎市文化財調査集録』第14集　川崎市教育委員会
村田文夫　1993『古代の南武蔵』有隣新書45
河合英夫　2000「川崎市千年伊勢山台遺跡」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会・鶴見大学
日本考古学協会第66回総会国士館大学実行委員会　2000『文字瓦と考古学』日本考古学協会第66回総会国士館大学実行委員会

横須賀市宗元寺跡

竹澤　嘉範

所在地　横須賀市公郷（御浦郡御浦郷）

横須賀市公郷町３丁目に所在した宗元寺は、大正時代から研究を続けた赤星直忠博士が採集した多量の瓦などにより、７世紀後半に創建され、８世紀初めから順次整備されて本格寺院として堂舎が完備したのは、８世紀末ないし９世紀初頭と推定されている。また、日本窯業史研究所の河野一也氏の研究により、宗元寺の瓦は横須賀市内の複数の瓦窯から供給されたことと、創建時の忍冬蓮華文軒丸瓦は、奈良県王寺町の西安寺跡から出土する瓦と同笵であることが確認されている。しかし、宗元寺の跡は発掘調査を実施していないので、伽藍配置や周辺に所在したと思われる御浦郡衙のことなど解明すべき問題を多く残している。

1　御浦郡走水郷と山形女王

地方における古代寺院の造営は技術者の集団と各種の資材を必要とするので、在地の力だけでは不可能で、畿内の有力氏族や大寺院の援助があったものと考えられている。宗元寺の場合は宗元寺の所在する御浦郡が古東海道の房総へ渡る交通上の要衝なので、七道の広域行政を重視した大和政権の援助があったことと、同笵の瓦を出土する大和西安寺の関係で、百済系氏族の協力があったことが想定される。

宗元寺の造営に大和政権の援助があったと考えられることの一つに、天平７年(735) に作成された『相模国封戸租交易帳』（正倉院文書）に「従三位山形女王食封　御浦郡走水郷五十戸……」と記されている山形女王の存在がある。山形女王は『続日本紀』に神亀元年(724) ２月６日の項で“正四位下を授けられた”こと、天平17年(745) ８月27日の項で“正三位山形女王薨ず　女王は浄広壱の高市皇子の女である”ことが記されているが、天皇家の系図には見当らない。

山形女王の父高市皇子(654～96) は天武天皇の皇子で、壬申の乱のとき天武軍を統率して功績をあげた。天武の長子だが母の身分（地方豪族出身）が低かったため、皇后（持統天皇）を母とする草壁皇子など年少の異母弟より下位におかれ、皇子序列は８位であったと推定されている。しかし、人望が非常に厚かったため、天武14年(685) に草壁皇子、大津皇子に次ぐ浄広弐位を授けられ、草壁皇子没後の持統天皇４年(690) には太政大臣に任じられている。

『続日本紀』には高市皇子の子女として長屋王・鈴鹿王・山形女王・河内女王が記されている。このうち、長屋王(684～729)については左大臣（正二位）に任じられたが、聖武天皇の生母藤原宮子の称号に関する勅の不備を指摘したため、藤原氏の陰謀により自刃させられたこと、鈴鹿王(?～745)については知太政官事に任じられ、橘諸兄政権の安定に協力したこと、また、河内女王(?～779)については不破内親王（孝謙天皇の異母姉妹）の呪詛事件に連座して無位となったが、その後、本位の正三位を授けられたこと、などが記されている。しかし、山形女王については上記以外は記されていない。

赤星博士は昭和32年(1957)発行の『横須賀市史』の「宗元寺時代」で“走水郷とみられる宗元寺付近

は皇族の食封であったので、領主の大権力と大財力の存在は疑う必要がなくなる。この地の豪族たる郡の役人の権力と財力だけでは難しいから、両者相俟って宗元寺ができたのかも知れない。…”と述べている。また、『相模国封戸租交易帳』に記されている走水郷については、承平年中(931～8)の成立とされる『和名類聚抄』の御浦郡五郷（田津・御浦・氷蛭・御崎・安慰）のうちの御浦郷と考え、その範囲を房総への渡海地点である走水、7世紀末創建とされる宗元寺が所在した公郷、中世の豪族三浦氏の本拠地である大矢部・衣笠、幕末に米国ペリー提督が上陸した久里浜などを含む地域と考えていた。

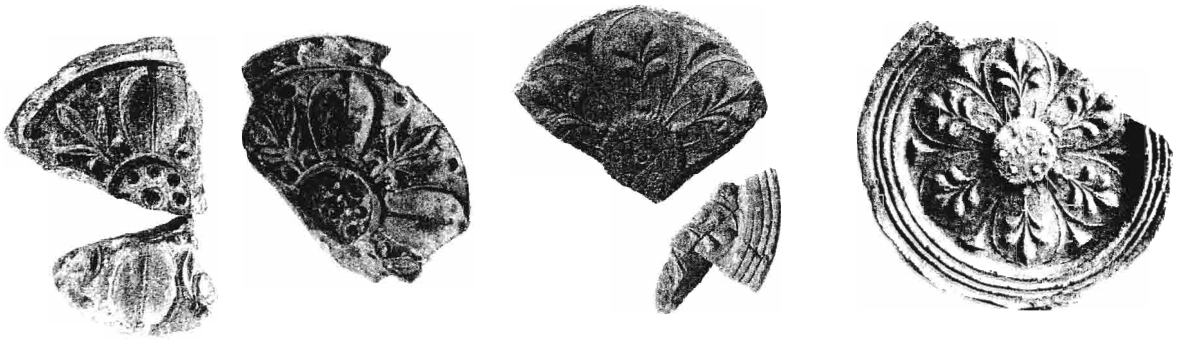
以上のように走水郷の封主であった山形女王については、他の高市皇子の子女に比べ不明なことが多いが、薨去時は正三位であったので、かなりの財力等を有していたことが考えられる。赤星博士が『横須賀市史』の「宗元寺時代」で述べているように、宗元寺の造営には天武天皇系皇族である山形女王の援助が大きかったものと思われる。

2　同笵の忍冬蓮華文軒丸瓦

7世紀後半の天武・持統朝の時期は地方豪族の造寺活動が活発化し、寺院の造営は全国的規模で行われた。このため、各地の寺院の軒瓦で同笵・同文のものが多く見られるようになった。類例が少く特異な瓦とされる忍冬蓮華文軒丸瓦の場合も六葉蓮華文の各弁内に忍冬文を飾る形式のものと、忍冬文と蓮華文を交互に四個ずつ配す形式のものが各一例ずつ報告されている。いずれも遠隔地における同笵瓦で、笵型の移動などの検討を要するものである。

前者は河内（現大阪府羽曳野市）の野中寺出土瓦と尾張（現名古屋市中区）の元興寺跡出土瓦で、寛政8年(1796)、尾張桜天神社別当霊岳院主、瓦礫舎（本名朴厳祖淳）著の『古瓦譜』に双方の瓦が同笵であることが記されている。この同笵関係は近年の発掘調査で確認され、2百年以上も前の瓦礫舎の卓見が明確になった。また、梶山勝氏は「尾張・三河の同笵、同系軒瓦」で“尾張元興寺跡出土の忍冬弁蓮華文軒丸瓦は、同笵のものが、河内国丹羽郡（現大阪府羽曳野市）の野中寺から出土している。尾張元興寺跡のものは、野中寺の笵が改刻使用されたことが明らかになっている。尾張元興寺跡の同型式の瓦の出土量からみて、笵型の移動は確実であり、海上経由でもたらされた可能性もあろう”と、元興寺跡の笵が野中寺から移動したことを記している。

後者は大和（奈良県王寺町）西安寺跡出土瓦と相模（神奈川県横須賀市）宗元寺跡出土瓦である。赤星直忠博士は昭和10年(1935)に発表した「相模宗元寺址」で、宗元寺跡の瓦が西安寺跡の瓦と同文であることを記している。次に河野一也氏は平成2年発表の「奈良時代寺院成立の一端について　－相模国宗元寺の古瓦について－」で、宗元寺の創建時の瓦と西安寺の瓦を復元図で比較し、文様構成の一致などから“同笵の資料と判断されるであろう”と記している。その後、河野氏は双方の瓦の現物対比が必要と考え、平成11年(1999)11月に宗元寺の瓦を奈良県王寺町に持参して、西安寺の瓦との認定作業を行なった。その結果、外区幅が相違し、製作技法は異なるが、複数ヶ所の笵キズの一致から同笵であると認定し、平成12年5月実施の日本考古学協会総会でその詳細を発表した。



1 西安寺跡　2 宗元寺跡　3 野中寺　4 元興寺跡

1・3 京都国立博物館特別展目録『畿内と東国』より転載
4　たなかしげひさ『奈良朝以前寺院址の研究』より転載

第1図

以上の同笵瓦の年代は、西安寺の瓦は7世紀第2四半期(626～650年)、他の瓦は7世紀第4四半期(676～700年)頃に位置づけられている。ただし、宗元寺の瓦については千葉大学教授岡本東三氏が平成8年(1996)刊行の『東国の古代寺院と瓦』などで、東国に7世紀第3四半期(651～675年)以降分布する畿内系の山田寺式や川原寺式の軒瓦に先行するものとし、7世紀第2四半期に遡る蓋然性が高いと記している。

文献

赤星直忠　1935「相模宗元寺址」『史跡名勝天然記念物調査報告書』第3輯　神奈川県
赤星直忠　1957「宗元寺時代」『横須賀市史』横須賀市
岡本東三　1996『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館
梶山　勝　1992『瓦礫舎』名古屋市博物館（瓦礫舎1796『古瓦譜』）
梶山　勝　1994「尾張・三河の同笵、同系軒瓦」『古代』第97号　早稲田大学考古学会
河野一也　1990「奈良時代寺院成立の一端について　－相模宗元寺の古瓦について－」『神奈川考古』第26号　神奈川考古同人会
河野一也　2000「相模宗元寺の西安寺式鐙瓦について」『日本考古学協会第66回総会－研究発表要旨－』　日本考古学協会
笹山晴生・吉村武彦編　2000『続日本紀　索引・年表』岩波書店

小田原市千代寺院跡と千代南原遺跡第Ⅵ・Ⅶ地点の調査

滝澤　亮

本コメントでは、千代寺院跡（通称千代廃寺）と筆者が直接調査に携わった千代南原遺跡第Ⅵ・Ⅶ地点との関係において、千代寺院跡の一端をできうる限り明らかにしていきたい。

まず千代南原遺跡の第Ⅵ地点と第Ⅶ地点の調査の概要について述べ、最後にそれらの調査結果がもたらした成果について述べてみたい。また最後に千代寺院跡の性格につい簡単にまとめたい。

千代南原遺跡第Ⅵ地点

我々が1994年に発掘調査を行った千代南原遺跡第Ⅵ地点は、千代寺院跡の南から南東側にかけての台地の縁辺部を宅地造成に伴う事前調査として、道路部分を対象にトレンチ状に調査を行った（滝澤1995）。

本調査地点からは、竪穴住居跡２軒（古墳時代後期）、特殊遺構４基、溝状遺構５条、土坑、ピット等が検出されている。竪穴住居跡以外は弥生時代末から古墳時代前期、奈良・平安時代、近世にまで及ぶ時期のものである。

この地点の調査成果として注目されるのは、一番南の地点から大規模な古墳跡と考えられる周溝跡SD02が発見された。調査区の関係から全掘は出来なかったが、一部にトレンチを設定し遺構の確認を行った結果、墳形は円形で、直径が50m以上であろうことが予想された。また時期は、古墳時代前期の土器が周溝内下部および底部付近から出土していることから古墳時代前期のものと考えている。

この周溝内上層から、千代寺院に伴うと考えられる布目瓦片が出土しており、千代寺院跡成立期には、周溝はほんの窪み状を呈していたことが想像された。またSX04と呼称した特殊遺構を始め、SI01・02とした2軒の竪穴住居跡なども千代寺院跡成立期に大規模な削平が行われているらしいことが伺われた。

これらのことから千代寺院跡に南面する、この地域での遺跡の変遷が確認されたと考えている。すなわち弥生時代終末から古墳時代前期にかけては墓域、或いはそれに近い様相のもの。古墳時代後期には住居地域。奈良・平安時代には寺院およびそれに付随する何の建造物もない地域。小地域の調査ではあったが、このような結論に達し、古代までにおける千代台地一端の変遷を知る事となった。

千代南原遺跡第Ⅶ地点

次に、千代南原遺跡第Ⅶ地点は試掘調査を1996年に行い、1998～99年まで本調査を行った。この調査は区画整理に伴う事前の調査であったため充分な調査が行えたとは考えていないが、千代寺院跡の立地する千代台地の南西側の沖積低地面をほぼ東西方向に横に長いトレンチ状に調査区を設定し調査を行った（小出・小池他1997・2000）。

本調査地点は、大部分が沖積低地のため明確な遺構としてはA地区で検出された井戸跡以外には発見

されていない。しかしながら、特筆すべきはC地区から多くの木製品と共に木簡2点が出土している点であろう。C地区は寺院跡の伽藍地の中心部分と考えられている千代南原遺跡第Ⅰ～Ⅲ地点から考えるとやや南東に外れた調査地区であり、また区画整理に伴う道路部分のみの調査といった条件のため南北方向への遺物の広がりが掴めていない点は惜しまれる。

またこの地域では地質の特徴からか、逆断層が多く見られ（上本・上杉1997)、このC地区でもそれがみられた点には注意が必要である。報告書では延暦19年（800年）の火山灰層の純層直下から木簡が出土していることになっているが、土層の堆積は複雑であり、主観的な出土年代の評価は危険な部分を多く含んでいる点を忘れてはならないと考えている。

千代南原遺跡第Ⅶ地点の調査で重要な問題は、上述した木簡出土に限定された問題でなく、このC地区の木簡出土地点の付近から同様の状況で多くの木製品が出土している点である。特に祭祀関係の遺物の出土、ササラ棒・形代（刀子形、鏃形）・斎串・琴柱などは官による祭祀行為であり重要であろう。またこの地域を官が管理していたとすれば、農具と考えられる木製品、大足・えぶり・田舟・鋤等が見られる点は注意を要する。

ここで更に注目したい点として述べておきたいのは紡織具としての「かせ」の出土である。従来から紡織生産は官によるものとの考え方も強くあったが、考古学的にはそれを強く裏付ける資料は無かったといっても過言ではない。従来から言われている、庸調の代納制の問題とも考え合わせて検討していかなければならない重要な問題であろう。

しかしこれらの様相は、まさしく従来から言われてきている官的な施設の姿に他ならない。しいて言うならば千代寺院跡や、それに付随する施設が、最低限郡にかかわる施設であることを裏付けていることの傍証に他ならないと考えているのは、私だけの思い込みであろうか。煩雑になるためここでは再度触れないが、このことは木簡自体の内容の解釈とも矛盾してこないと考えている（註1)。

まとめ

最後に千代寺院跡について述べるならば、本寺院は足柄上下郡に強い影響力を持っていた郡司とかの豪族層、そのことは千代南原遺跡第Ⅵ地点で発見された古墳跡の規模を見ればわかるように、たとえば「師長」の国造家等の一族が中心となって律令制施行期である奈良時代前半期から中葉にかけて建立されたと考えられている（註2)、「郡寺」あるいは、荒井秀規氏が指摘するような「定額字」としての性格を持った寺院（註3）であったのであろう。また寺院の伽藍は方一町の南面する法隆寺式伽藍（註4）であるらしいことは、前述の千代南原遺跡第Ⅵ地点の調査結果からも肯ける事である。また千代寺院跡が、相模国分寺に先行する形で法隆寺式伽藍を採用している点は、はなはだ興味深い点であろう。

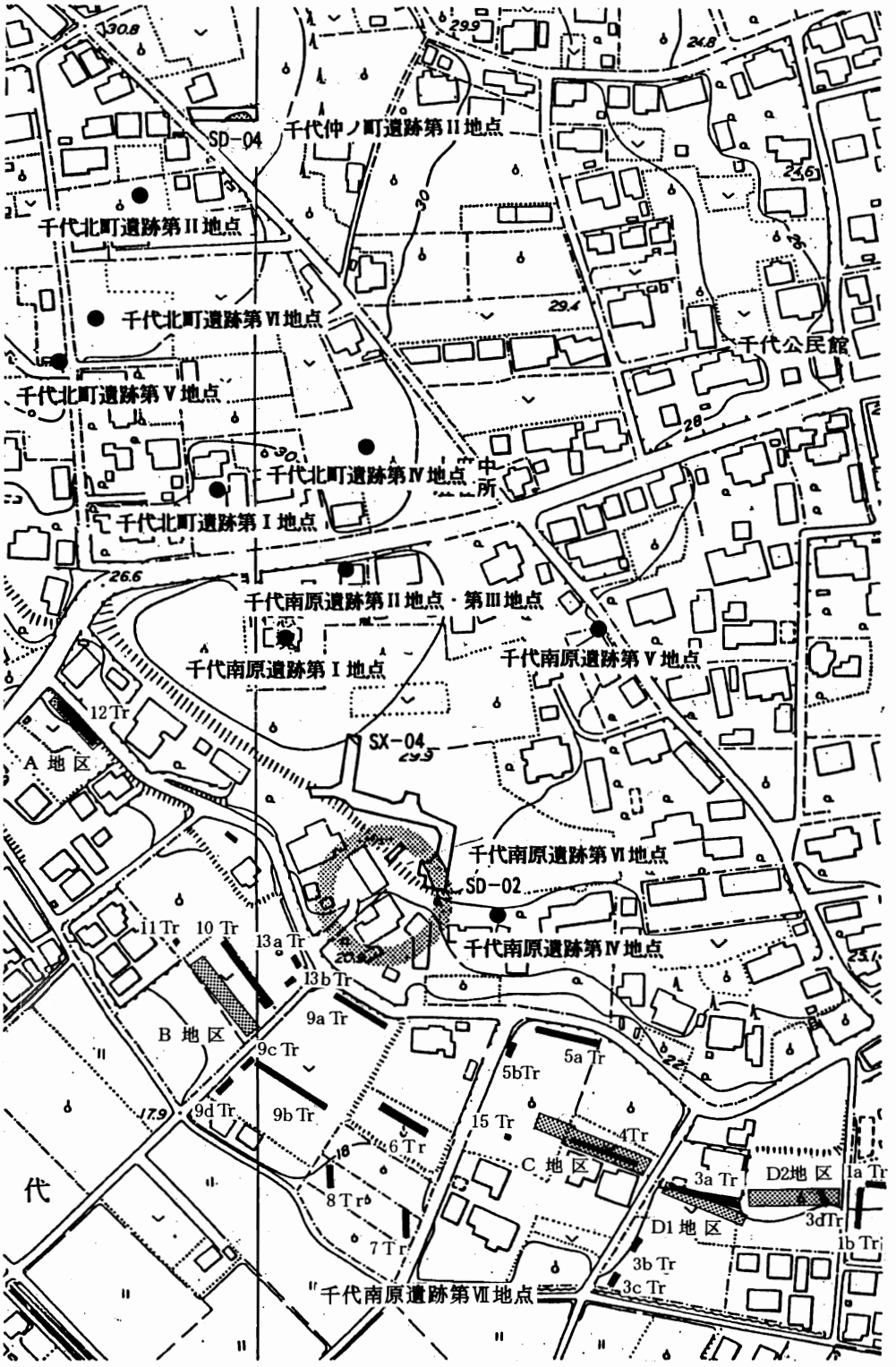
また、いまだ全容ははっきりしないがこの千代南原遺跡周辺の台地上には郡家を始めとする足下郡の中心地域が存在し、それゆえ下曽我遺跡や千代南原遺跡第Ⅶ地点といった遺跡が存在しているのであろう。

註

(1) 小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団　2000『千代南原遺跡第Ⅶ地点』の木簡の解釈を参照願いたい。
(2) 河野一也　2000「シンポジウム『木簡が照らす古代の小田原』に参加して」『神奈川地域史研究』第18号
(3) 荒井秀規　2000「小田原市千代南原遺跡出土木簡をめぐって」『神奈川地域史研究』第18号
(4) 岡本孝之　2000「千代寺院跡の復元と木簡の位置」『神奈川地域史研究』第18号

文献

滝澤　亮　1995「小田原地域の古墳成立への一視点」『考古論叢神奈河』第４集　神奈川県考古学会
小出義治・小池　聡ほか　1997『千代南原遺跡第Ⅶ地点試掘調査報告書』千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団
小出義治・小池　聡　2000『千代南原遺跡第Ⅶ地点』小田原市東千代特定土地区画整理組合・小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団
上本進二・上杉　陽　1997「小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点のテフラ層序と地震跡」『千代南原遺跡第Ⅶ地点試掘調査報告書　附編』同上
神奈川地域史研究会　2000「シンポジウム　木簡が照らす古代の小田原」『神奈川地域史研究』第18号　神奈川地域史研究会



第１図　千代南原第VI・VII地点と千代寺院跡を中心とした既調査の遺跡

千代廃寺報告へのコメント

荒井　秀規

千代廃寺の近隣には、木簡が出土し足下評郡衙（初期国府説もある）に比定される下曽我遺跡、「厨」銘墨書土器が出土した千代仲ノ町遺跡、一昨年（99年）に米の出納や僧侶の教典習読を記録する木簡が出土した千代南原遺跡などが所在する。木簡の出土を受けて、小田原市教育委員会・神奈川地域史研究会共催のシンポジウム「木簡が照らす古代の小田原」（99年10月30日開催、神奈川地域史研究18号参照）が行われ諸問題が討議されたように、千代廃寺には寺院址研究のみならず空間的考察を可能ならしめる立地がある。

千代廃寺の性格はその空間の中で考えるべきもので、千代南原遺跡出土の木簡も下曽我遺跡を関連させた上で、千代廃寺が官寺的であったことを示していよう。千代廃寺は評郡衙に隣接する寺院として、官衙機能の一部を担う寺院（定額寺か）であったばかりでなく、武蔵国分寺と同笵の鬼瓦を持つことなどから類推するに、国分寺建立以前に相模国を代表する一寺であった可能性が高い。

また、注目したいのは千代南原遺跡で大量の木製品が出土したことである。その大足などの農機具や祭祀具は、周辺に農業経営の拠点があったことを示すが、その経営主体は千代廃寺、すなわち千代廃寺の寺領が展開していた事を推測させるに十分である。千代仲ノ町遺跡の「厨」の墨書土器も、千代廃寺の御厨のもので、農作業の労働力を確保するため、ないしは農作業終了後の宴があったことを示しているのかも知れない。

従来の寺院址研究は、伽藍配置や瓦編年に収束しがちだったが、この千代廃寺や、やはり昨年に教典関係の木簡と漆紙が付近より出土した下寺尾廃寺、そして昨年三月に新聞発表が行われた影向寺廃寺の評銘文字瓦など、造寺活動や寺院経営、仏教行為や僧侶の活動、寺院と官衙との関係、寺院址研究も、考古学的成果（遺構や瓦・灯明更・木器など出土物）と文字資料を連動させることで、より大きな成果が期待されている。神奈川の古代寺院研究は、99年から2000年にかけての大きな画期を迎えた。そうした古代寺院の総合的研究に千代廃寺はかっこうのモデルと言えよう。

下寺尾寺院跡のコメント

河合　英夫

はじめに

『下寺尾寺院跡の研究』や『千代寺院跡の研究史的復元』への関心の高まりが、早春の講座を企画したきっかけと思われるが、『下寺尾寺院跡の研究』は下寺尾の古代寺院研究の結実ではなく、その出発点といえる。岡本孝之氏とは「相模の古代を考える会」の例会などを通して、下寺尾寺院跡の伽藍配置や創建年代について意見を交わしてきた。その背景には伽藍推定地の南東側において平成７年度より香川・下寺尾遺跡群の発掘調査を実施してきた経緯があり、また講座開催の前日には木簡や県下初の漆紙文書発見の報道がなされるなど、下寺尾寺院跡をめぐる関心は頂点に達していた。しかし、その実態は岡本氏が指摘するように必ずしも明確ではなく、推論に推論を重ねてきた状況であった。講座当日は評者として、創建年代や下寺尾遺跡群との関連を述べたが、書面を借りて当日の責を塞ぎたいと思う。

１　創建年代について－出土瓦の検討－

一般に瓦当文様の型式学的方法や他の遺物との共伴関係によって創建年代を求めるが、下寺尾寺院跡からは軒先を飾る瓦は発見されていない。報文では平瓦の造瓦技法の検討を行った河野一也氏の見解をもとに創建年代の検討を行い、国分寺造営以前のⅠ群と以後のⅡ群に分け、桶巻作りのⅠ群を創建瓦と見做して７世紀後半の年代を与えた。この年代観は、Ⅰ群Ａ平瓦が宗元寺跡からも出土していることを一つの年代的根拠としたものである。宗元寺の年代については河野氏のほかに岡本東三氏や上原真人氏の見解があるが、大和安西寺の畿内系瓦当（忍冬蓮華文軒丸瓦）が宗元寺に将来されて以降、深田廃寺では近江系の稜をもつ素弁蓮華文軒丸瓦が知られ、相模の初期寺院の成立過程を考える上で重要な資料となっており、講座では竹澤嘉範氏によって整理されている。

ここでは下寺尾寺院跡から軒瓦がまったく確認されていない点に注目したい。各地への波及の過程で、時期を明らかにする普遍的な遺物として軒瓦（県下では宗元寺・深田廃寺・千代廃寺・影向寺など）があり、典型的な白鳳寺院であれば大勢として認めることができよう。瓦当文様の伝播の速度は必ずしも一律ではないが、造瓦に代表される造寺技術の伝播を考えるとき、まず国内では先進地域を掌握していた階層（伝統的勢力を背景とした在地首長層や有力郡司層）によって寺が造営され、それらは基壇上に建つ総瓦葺き建物で構成された堂塔をもつ例が多い。下寺尾の創建年代の上限を評制段階まで遡らせることは、寺院の性格や造営者の階層、あるいは高座郡内の動向とも関係するもので、その年代については慎重に検討すべき課題と思われる。

多くの問題を含んでいるが、平瓦や丸瓦のみが出土するという事実は、必然的にそれらに眼を向けるべきことであり、河野氏や岡本氏らの研究はこうした状況の中で生まれ、実態を反映した仏教文化波及の重要な手掛かりを模索しているものと考えられる。ここにおいて問題の鍵の一つが軒瓦以外にあることは歴然としており、出土瓦の分析を通しての研究方法は現時点の到達点と理解している。

2 隣接地の調査—香川・下寺尾遺跡群との関連—

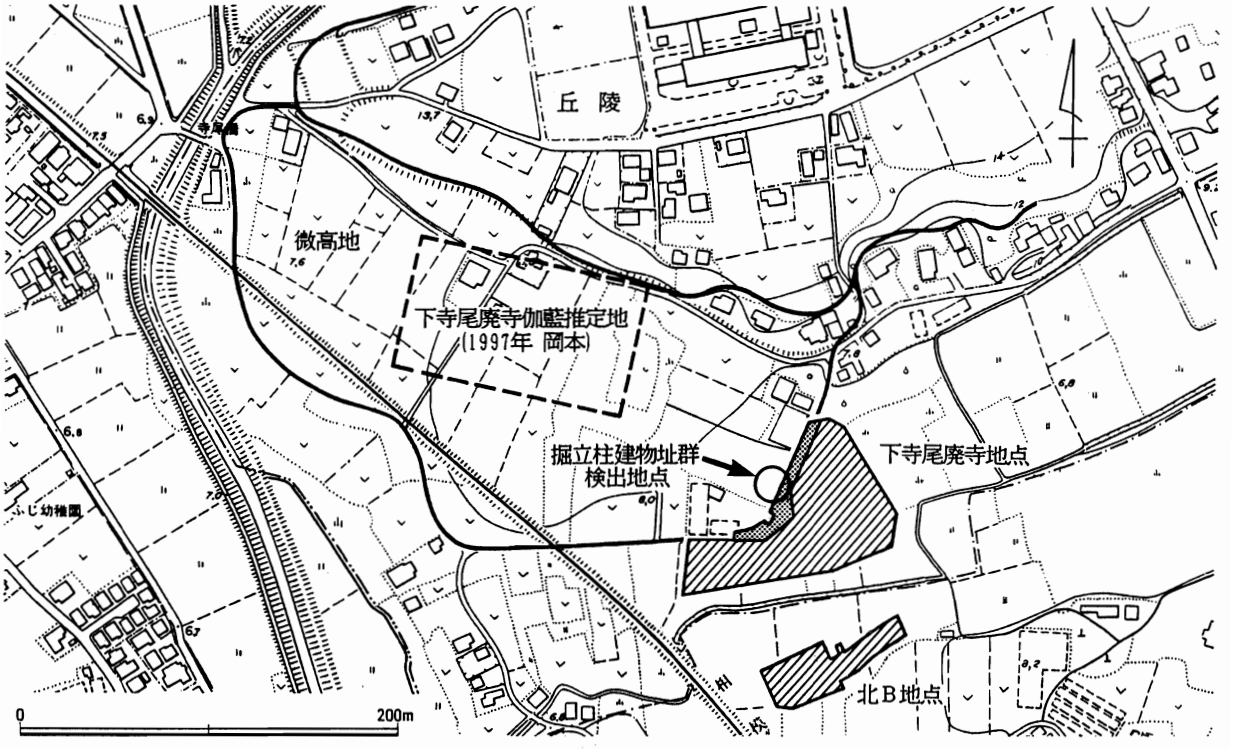
大形掘立柱建物の発見　掘立柱建物址は寺院跡の存在する自然堤防地形の南東隅で２棟発見された。南北に柱筋を揃え、北側の１号は桁行３間の総柱建物、南側の２号は桁行４間・梁行３間の側柱建物と推定される。柱間寸法は７尺（2.10ｍ）以上を基本とし、ほぼ完数尺で計算され、柱の掘り方は方１ｍ前後の大形のものである。いずれも西側の調査が十分でないが、自然堤防地形の南東隅の東面に沿って計画的に配置された建物群は特筆される。１号建物の掘り方からは、８世紀前半の湖西産と推定される須恵器が出土しており、上限年代を知る手掛かりとなっている。

これらの建物群の性格については寺院跡との関連が想定されるが、一般に雑舎群は寺の北側や東西に配置される例が多い。発見された場所は推定地の南東側で、見方を変えると寺の南面となる。現状では雑舎群と判断するよりは、寺院造営主体者（在地首長層）の居住域に関連する施設、あるいは官衙関連の建物と想定したい。寺院と造営者の居宅、あるいは役所との関係で注目される。後者を想定した場合は西側に寺院推定地を置くと、面積的には１町四方が精一杯で郡庁域を想定するには無理があろう。

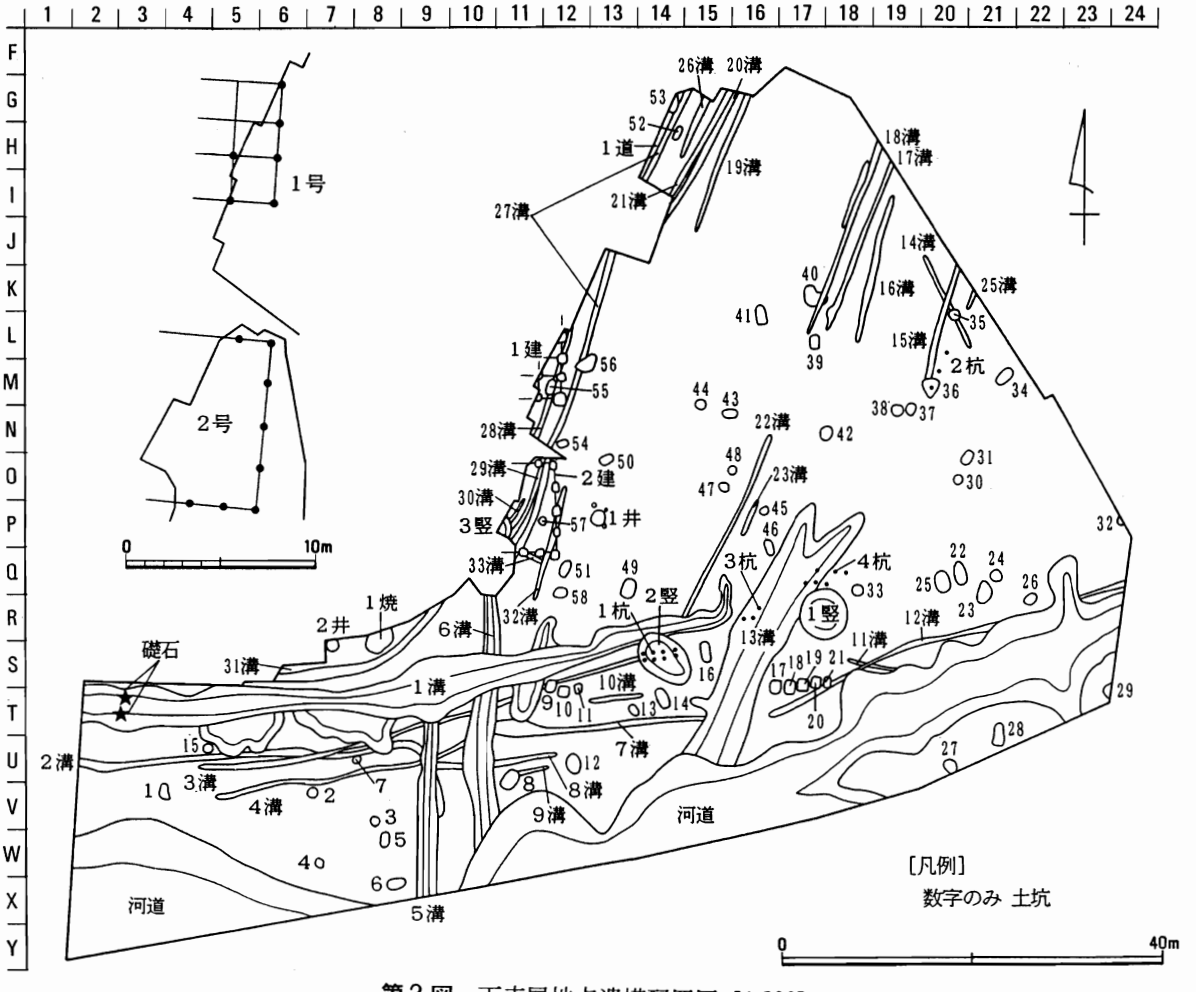
旧河道と祭祀行為　木簡や墨書土器、県下初の漆紙文書、多量の食器類などが発見された北Ｂ地点は、寺院推定地の南東約200ｍ付近に位置し、遺物は駒寄川の旧河道から出土した。それらは大小11のブロックに分かれ、時期的には８世紀前半から10世紀初頭までの資料であるが、そのピークは９世紀代で、８世紀前半の資料は少なく、７世紀代の遺物は見られない。木簡や漆紙文書は仏教関係の習書と見られ、いずれも通常の行政文書とは異なり、後者は写経体といわれる独特の書体の様相であることから、写経活動の一端を示す資料と考えられる。墨書土器は刻書を含めると50点ほどを確認している。記載文字には田・力・具・大町・万・十・厨・○などのほかに、特異な例として坏の体部内面に７文字が記されたものや、体部外面に人面が描かれたものもある。多量の墨書土器を投棄する行為は、一種の呪術的意味をもつと考えられるが、様々な角度からの検討が必要である。墨書土器に関連して、食器類の遺存率をみると、全体に完形品の割合が多く、墨書の割合は１割程度と考えられる。時期的には９世紀中頃から後半の資料が中心である。文字資料や食器類以外では、供養具（浄瓶・水瓶・鉄鉢・灯明器など）や、陶製の円面硯、木製品（曲げ物・槽・盆・椀・弓・櫛・田下駄・建築部材・木簡状など）、饒益神宝、銅製の鈴、それに馬骨なども出土している。供養具は宗教関連を示し、馬の犠牲（生贄）は雨乞いや祓いえなどの神仏に捧げる祭祀を示すものと考えられる。また木製品には農具や服飾具、容器、祭祀具、部材など様々なものがあるが、農具や祭祀具などは穢れなどを払う祓えや豊作を祈願する祭祀を示すものと想定され、地域の民衆の参加も推測される。結論的にいえば、現段階では寺院と造営主体者あるいは行政掌握者、そして地域の民衆を含めた、仏教信仰とともに、在地の祭祀・儀礼が行われた場所と推定され、地域の古代社会の景観を彷彿させる一級の資料といえよう。

おわりに

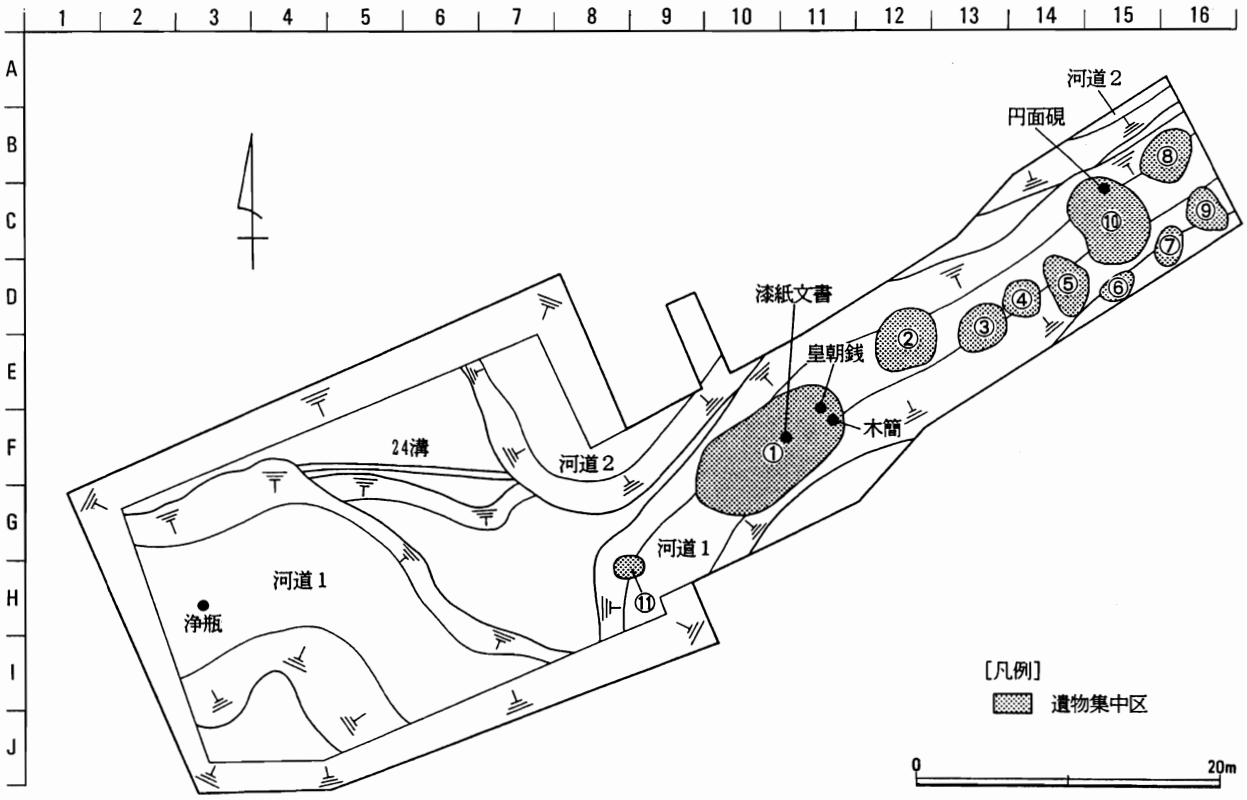
下寺尾寺院跡をめぐる様々な問題は周辺の発掘の進捗によって新たな局面を迎えているが、７月には市教委によって一部調査が実施された。その空白の解明の到来を、熱い思いで待ち望みたい。



第１図　下寺尾廃寺伽藍想定地及び下寺尾地区調査範囲位置図 [1:4,000]

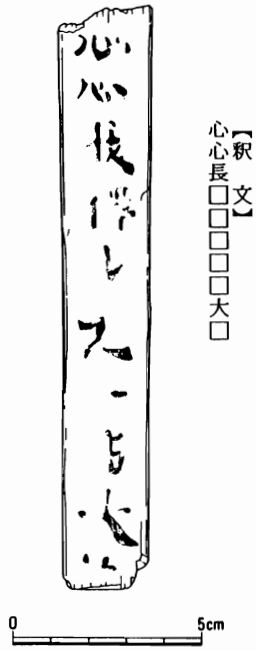


第２図　下寺尾地点遺構配置図 [1:800]



第３図　北Ｂ地点遺構配置図［1:500］

第４図　北Ｂ地点出土漆紙文書［1:1］



第５図　北Ｂ地点出土木簡［1:2］

「かながわの古代寺院」研究の成果と課題

河野　一也

1　はじめに

西暦2000年3月5日に神奈川県で始めて、古代寺院についての研究発表会が行なわれた。川崎市影向寺址（武蔵国）、横須賀市宗元寺跡、小田原市千代寺院跡、茅ケ崎市下寺尾寺院跡、相模国分寺・国分尼寺跡の発表が各研究者によって新しい視点で述べられた。また「民間における仏教の受容」と題し、村落内寺院と火葬墓を集成し、いくつかの問題点を指摘された。これは大変な労力を費やしたもので、今後、相模国の民間仏教を研究する上で基礎資料となるであろう。

私も「相模の古代寺院と瓦」と題し、今までの研究史を中心に、考古学講座と言うこともあり、瓦の作り方から、寺院造営氏族の様相、仏教受容の階層、寺院造営期間、伽藍と金堂規模を相模国の実態に則して述べたが、時間的制約により、理解が出来なかったと思われる。また最後に相模宗元寺の忍冬交飾蓮蕾文鐙瓦が奈良・西安寺の鐙瓦と同笵であることを速報として、さらに近年の研究により進展しつつある大住国府の問題を、変則単弁鐙瓦の系譜を見ることにより古瓦の研究の面から、大住国府の実態に迫り得ることを予測しておいた。

今回は当日の発表の要旨に添って要約し、私見を述べることにする。

2　初期寺院造営の実相

相模国で最も早く寺院が造営されたのは、茅ケ崎市下寺尾廃寺である。創建段階の古瓦に文様瓦の出土はないが、下寺尾型とした小札痕を凹凸面とも削り、またはナデ消している女瓦の製作技法が主体を占めている。また、男瓦にも小札痕があり、無段と有段がある。

次の千葉地廃寺の瓦は下寺尾型の瓦から石井瓦窯系、法塔瓦窯系、生産地不明の一群、からさわ瓦窯系と多くの生産瓦窯からの供給が特徴である。この中で、下寺尾型の女瓦、男瓦の作り方が石井瓦窯系の一部に継承されていることが最大の特色であり、主体を占めるようである。このことから下寺尾廃寺から千葉地廃寺への流れをよみ取ることが出来る。造営期間も下寺尾型からからさわ瓦窯の時期までを推定できる。

宗元寺の瓦は石井瓦窯系から始められ、法塔瓦窯系が主体を占める。この段階には下寺尾型類似のものは数点しか認められない。新たに奈良・西安寺の忍冬交飾蓮蕾文鐙瓦の笵を採用し、さらに鐙瓦の製作技法は千葉地廃寺とは違い、瓦当厚が厚い。また、現状では相模国で始めて重弧文宇瓦を採用し、法塔瓦窯段階では、縄叩きが出現する。このように宗元寺の造営には新たな造瓦組織を編成したものと考えられる。

また宗元寺の瓦の再調査を行った結果、新たに２点の新事実を確認した。ひとつは宗元寺の採集品の中に千葉地廃寺と同笵と思われる六葉単弁鐙瓦を確認した。従来は男瓦・女瓦の作り方から千葉地廃寺

から宗元寺への継続を考えていたが、それを補強することになった(註１)。もうひとつは、従来公郷瓦窯出土と考えていた退化した忍冬交飾蓮蕾文鐙瓦が法塔瓦窯系段階のものであることを確認した(註２)。このことは造営期間を石井瓦窯段階から公郷瓦窯段階までと考えていたが、ほぼ石井瓦窯の中頃から法塔段階と推定される。

深田廃寺については、法塔瓦窯系の瓦で占められている。

千代廃寺の創建瓦は、からさわ瓦窯で生産されたもので、三重圏線鋸歯文縁十葉複弁蓮花文鐙瓦と五重弧文宇瓦が組になる。さらに、三重圏十六葉細弁蓮花文鐙瓦と五重弧の上弧が欠けた四重弧文宇瓦が組になる。この千代廃寺の鐙瓦については細弁の鐙瓦にＶ字状の切り欠きのあることは、男瓦の剥離した資料とともに認識していたが、その後の資料見聞において複弁鐙瓦にもＶ字の切り欠きを確認した。これらは、男瓦先端部の凸面を斜めに切り、数ヶ所（３ヶ所か）をＶ字状に切り欠き男瓦と接合し、瓦当裏面をヘラナデし、下半周縁を弧状にユビナデしている。細弁鐙瓦の段階になると下半周縁の弧状のユビナデが不明瞭になる。この接合技法は奈良・奥山廃寺、大官大寺に見られる。ただ、男瓦先端の加工が凹面側であること、大官大寺の裏面がユビナデであることなど、今後の検討課題も多いが、千代廃寺の場合は工人の移動が考えられる(註３)。

吹切遺跡の瓦は、からさわ瓦窯後半の時期と考えられる。

３　相模国分寺の調査と古瓦の解釈

相模国分寺については、当日の須田誠氏の発表資料とその後発刊された『海老名市史 １ 資料編　原始・古代』の國平健三氏の論考を基に私見を述べてみたい。

僧寺の調査によって塔跡は切石積基壇外装から後に北辺のみ玉石積基壇外装に修理され、基壇周辺は３面の整地層が確認されている。僧坊跡は２時期の掘立柱建物の焼失後に礎石建物へと３時期を確認している。伽藍地区画溝も３条確認されている。また、須田氏は塔跡整地層から出土した、金堂製水煙の検討から３段階を想定出来るとしている。

尼寺の調査では、金堂跡は礎石建物の焼失後、掘立柱建物が再建されているとし、雨落溝敷石の下層に切石破片が混入していることから、明確でないが３時期に区分できると思われるとしている。回廊跡は少なくとも１回の建て替え、伽藍地溝は１回の掘り直しが認められたと理解されている。これらのことと、古瓦の出土から僧寺の鐙瓦、宇瓦を須田氏はⅡ類に、國平氏は不明瓦を入れてⅢ期に、尼寺は須田氏はⅢ類に、國平氏はⅢ期に分類されている。

さて、これらの理解は1988年以降の21次に渉る調査を行い導きだされたものであるが、中でも僧寺の塔跡、僧坊跡と伽藍地溝３条の調査と尼寺の金堂跡の調査は大変重要な意味を持っている。塔跡は切石積基壇外装から北辺のみ玉石積基壇外装で２時期、周辺の整地が３面、水煙の鋳造…補修…再鋳造の３段階と理解されている。屋根に葺く瓦は建物の建替えがなければ葺き替えられることはない。礎石立の建物の回数と周辺の整理の回数、あるいは屋根瓦を含めた水煙の補修の回数が一致するのか、どの段階の改築、補修が同時なのかを決定するのは困難と思われる。ただ、基壇面上に厚く覆った焼土層から

１回の建替えは確実である。他の事象は補修であろう。北辺の玉石積基壇外装は再建時の造塔工事の為に意識的に取り壊したものを補修したのであろう。周辺の石敷整地層は金銅製水煙が創建期雨落溝上面から出土していることから改築以前に２度整備されていたものと推定される。

僧坊跡は掘立柱建物Ⅱ期と礎石建物Ⅰ期の３時期があり、柱穴内の焼土から焼失前に２時期あったことがわかる。

伽藍地溝の３条は１号溝の方位の違うことが問題となるであろう。

尼寺の金堂跡は礎石建物の焼失後に掘立柱建物が再建されている。須田氏は金堂雨落溝の下層の基壇外装の切石破片の混入していること、掘立柱建物が再建されており、軒瓦が３種あることから３段階を想定しているが、これは國平氏の切石積基壇から玉石積基壇に改修した時期は僧寺の塔基壇を改修した時期と同じころであったとした方が理解しやすいと思われる。

これらのことから僧寺、尼寺とも大きく２時期と考えられ、それは創建時と再建時であろう。その間には建物によって補修が行われたのは当然のことと言える。これに伴う軒瓦は、須田氏、國平氏とも同じく３つに分類している。須田氏は僧寺をⅠ・Ⅱ類に、尼寺をⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に分け、建物などのＡ・Ｂ・Ｃ期の使用瓦や年代については、今後の検討課題としている。國平氏は軒瓦の種別をそのままにして僧寺をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期とし、Ⅱ期を不明、尼寺はⅠ・Ⅱ・Ⅲ期とし、土器の年代などからⅠ期を８世紀第４四半期、Ⅱ期を９世紀第２四半期、Ⅲ期を９世紀第３四半期としている。しかし、Ⅰ期としている創建段階のからさわ瓦窯系、法塔瓦窯系の小札痕のある女瓦を８世紀中頃にしている。そして、Ⅱ期を弘仁10年(819)、Ⅲ期を貞観15年(873)に考えていると思われるが、遺跡の実態とは対比しがたいようである。最も大きな違いは、尼寺の珠文縁単弁八葉蓮華文鐙瓦２種と左扁行唐草文宇瓦２種の理解である。筆者が尼寺鐙瓦Ⅰ類とした中房が饅頭状に丸く、重弁風の弁が三重に見え、珠文が丸いものと、Ⅱ類とした中房が平坦になり、重弁風の弁の先端が切れ、珠文が楕円になるもので、須田氏はそのまま尼寺Ⅰ類、Ⅱ類としている。國平氏はⅠ期、Ⅱ期とした分類は同じであるが、第427図「軒丸・軒平瓦の文様の変遷」では逆転している。単なる間違いと 考えたい。次に尼寺宇瓦Ⅰ類とした上向きで始まる唐草文が７回転（最初の下向きの巻鬚を入れると８回転）して、上向きで終り、唐草の茎が太く内外区の区別がなく、上部に７個、下部に７個の大きめの珠文を配すものと、Ⅱ類とした上向きで始まる唐草文が６回転（最初の下向きの巻鬚を入れると７回転）して下向きで終り、唐草の茎が細く内外区の区別がなく、上部に７個、下部に７個の小さめの珠文を配す２種がある。

この私見の２種を須田氏は下向きで終わるものをⅠ類、上向きで終わるものをⅡ類とし、國平氏は同じく下向きで終わるものをⅠ期、上向きで終わるものをⅡ期としている。これを須田氏は鐙瓦の分類はそのままで宇瓦を逆転させ、國平氏は鐙瓦、宇瓦とも逆転させている。調査事例からの判断とすれば、事実と認定せざるを得ないが、いくつかの疑問点を述べてみたい。瓦の顎の型態は通例、直線顎から曲線顎になると考えられることから、宇瓦は僧寺Ⅰ類から尼寺Ⅰ類（曲線顎）へ、さらに尼寺Ⅱ類（顎の凸面下端を削る面取曲線顎）、僧寺Ⅱ類（やや大ぶりで凸面側に多量の粘土を貼りつけている曲線顎）に変遷していると考えた（第１図）。それから下向きで終る宇瓦尼寺Ⅱ類と僧寺鐙瓦Ⅱ類（國平Ⅲ期）の

単弁六葉鐙瓦と僧寺宇瓦Ⅱ類（國平Ⅲ期）とした均正唐草文宇瓦は瓦尾根瓦窯から出土している。國平氏はⅠ期の８世紀第４四半期以前に尼寺の創建期の瓦を瓦尾根瓦窯で生産し、Ⅱ期に８世紀第２四半期（河野再建期）は、生産瓦窯は不明、Ⅲ期の９世紀第３四半期（河野補修期）はまた瓦尾根瓦窯で生産されたと考えている。休止期間をおいて100年以上にわたって使用されたことになる。

今回の須田氏、國平氏の論文に対し、私見をすべて変えることにはならないが、須田氏のＡ・Ｂ・Ｃの３期と國平氏のⅠ・Ⅱ・Ⅲ期は遺構の実態と即しても、創建期、再建期、補修期とみた方が無難であろう。古瓦は僧寺Ⅲ類、尼寺Ⅲ類に分類し、単弁六葉蓮華文鐙瓦、簡略均正唐草文の組合せが同時期と見るならば、僧寺創建期の鐙・宇瓦の組合せに対し、私見の尼寺Ⅰ・Ⅱ類（須田Ⅰ・Ⅱ類、國平Ⅰ・Ⅱ期）の鐙・宇瓦の組合せはⅠ類からⅡ類へ継続させて、１群と考えた方が良いようにも思える。不明瓦窯で生産されていたものを瓦尾根瓦窯で本格的に生産体制が整えられたのであろう。単弁六葉と簡略均正唐草文は弘仁10年（819）以降の再建期と考えたい。貞観15年（873）以降の補修期には若干の瓦が差し替えさられたのみであろう。他の国分寺の例をみても９世紀後半の時期にはまた瓦の補修、改修事例は見られるが９世紀末～10世紀に入ると見られなくなる。

須田氏は僧寺の金堂・講堂・塔の位置関係と僧房軸線のずれ、ＳＤａがやや西に振れていることから法隆寺式伽藍配置が当初からの造営計画ではなかったこと、他の国分寺の事例から相模国分寺も塔と僧房が先行したと考えられている。しかし、僧房の調査によると焼失以前に２時期あることが判明していることから考えると、僧房Ⅰ期の建物は上総国分僧寺Ａ期の基壇建物と僧房、尼寺Ａ・Ｂ期にかけての仏堂、講堂、尼房、下野国分僧寺草創期（Ⅰ期）のＳＢ650、ＳＢ759, 尼寺創建期（Ⅰ期）のＳＢ200、常陸国分尼寺の調査例(註４)など他の国分寺の状況と一致している。これらは仮設的な仏堂（金堂）と僧房と考えられている。推断するならば相模国分寺の北方建物と呼称されている桁行７間の建物は仮金堂と考えられる。相模国分寺の場合もこの仮金堂と僧房Ⅰ期の建物をもって瓦葺き建物以前の創建Ⅰ期、あるいはＡ期となる可能性がある。このような事例が関東の７ヵ国の国分寺の調査によって３ヵ国で確認され、相模国分寺を含めて創建Ⅰ期、Ａ期が推定される国分寺もある。

これらは一寺制段階の天平９年の勅によると考えられている。なお、尼寺においても見られることから、二寺制が規定された天平13年２月の勅によっても仮金堂と僧房から創建が開始されたとも考えられる。仮であっても瓦葺き金堂の完成までは機能していることを考えれば、仮と言うよりは、それが本来の姿ではないかと考えられる。

最後に國平氏の鐙瓦僧寺Ⅰ類の単弁五葉蓮華文と宇瓦僧寺Ⅰ類の均正唐草文は宗元寺の忍冬交飾蓮蕾文鐙瓦を図案化させたものとみることは一つの考え方であろう。

4　相模国分僧寺の伽藍と金堂規模

相模国分僧寺が法隆寺式伽藍配置であることは古くから良く知られている。そのため前身寺院を国分寺に転用したように理解されてきたが、最近はやっと当初より法隆寺式伽藍配置で国分僧寺として建立されたことが認識されたようである。

国分僧寺瓦　　国分尼寺瓦

僧寺
Ⅰa類

尼寺
Ⅰa類

3

尼寺
Ⅰb類

僧寺
Ⅱ類

尼寺
Ⅱ類

第1図　相模国分寺宇瓦の直線顎から面取曲線顎への系譜

法隆寺式伽藍配置については、大脇潔氏の「法隆寺式伽藍配置の始まり」によると（第２図Ａ）、わが国の寺院の伽藍配置は飛鳥寺(596年頃)、四天王寺(610～620)、山田寺(648年頃)のように左右対象であったものが、法隆寺式伽藍配置によって塔と金堂が左右に並ぶ非対象の伽藍配置が出現したと言う。法隆寺は斑鳩寺(若草伽藍 620年頃)焼失後の680年頃に建立されたと考えられている。森郁夫氏は７世紀半ば近くには成立したであろうと考えられていたが、近年の吉備池廃寺の調査によって百済大寺であることが確認され、639年、舒明天皇によって発願された天皇の寺院であることがわかった。この寺は、東に金堂、西に塔を配した法隆寺式伽藍であった。従来、漠然と法隆寺が最古と考えられていたが、日本で最初の天皇発願寺院である、百済大寺に対して、大脇氏はこのパノラマ的、あるいは箱庭的な伽藍配置を極めて日本的な建物配置と称し、東に塔、西に金堂の法起寺式伽藍配置も同様であると考えられている。百済大寺は占地を替え、高市大寺、大官大寺、大安寺と法灯を受けついでいく。

さて、伽藍の規模であるが、百済大寺の伽藍の規模は明らかではないが、塔、金堂間の距離を見ると、法隆寺と比較しても大規模であることがわかる。百済大寺を頂点として法隆寺規模、法輪寺規模に分かれる可能性がある。また尼寺廃寺が東西法隆寺式であることは私の推定した、小田原市千代廃寺と同じであることは興味深い。また本来は講堂は回廊の外にあるが、海会寺、相模国分寺のように回廊に取り付く伽藍、斉尾廃寺のように築地の中に取り込まれる伽藍がある。この伽藍規模の大中小は、寺院造営氏族の階層差であろうが、７世紀代までのようで、奈良時代になると、くずれるようである。

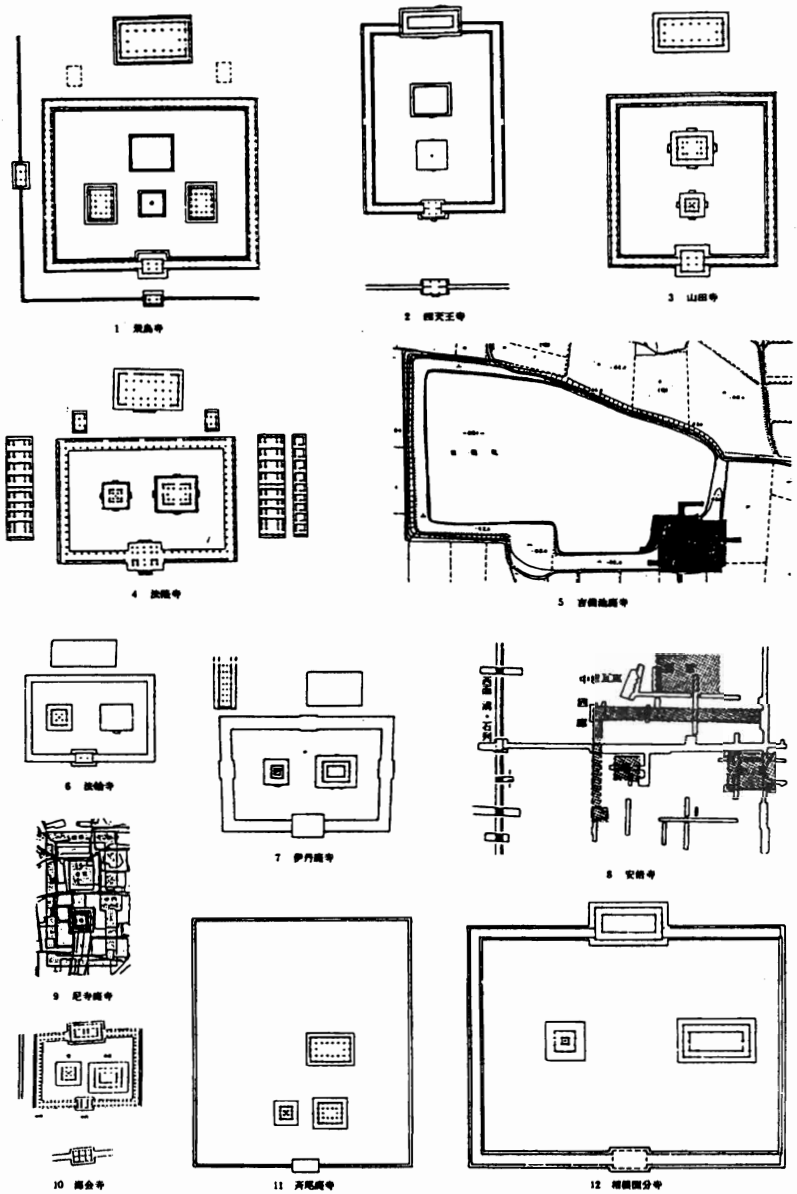
金堂規模については、花谷浩氏の「飛鳥・藤原京の古代寺院金堂規模比較図」によると（第２図Ｂ）、天皇発願寺院の百済大寺は別として、方形企画から長方形企画へ、梁行の四面は変らないが桁行が４間から７間にかわり、規模が大きくなる傾向が見られるようである。

このように見てくると、相模国分寺の僧寺は法隆寺式伽藍配置とは言いながら、規模は国大寺であるため大きいが、講堂の取り付き、金堂の規模から見ても、新しい時期のものであることが理解し得る。

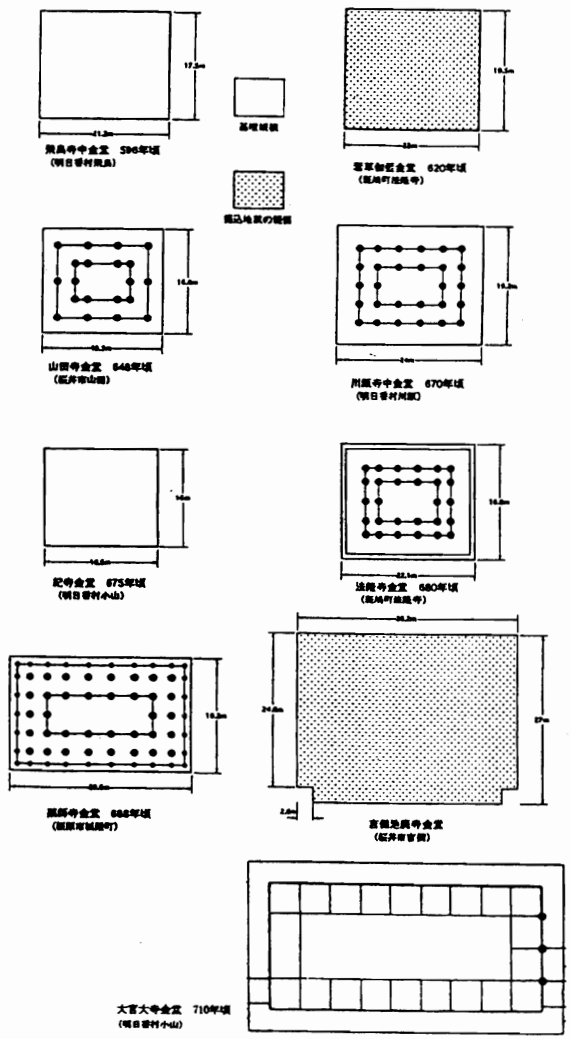
5　相模の寺院造営期間

各寺院出土の古瓦を定点に寺院造営期間を考えてみたい。造営期間をどのように見るかであるが寺地の選定、伽藍配置の企画、立案、設計、地鎮、地割、建築材料の調達、運搬、遣り方の設定、地形、基壇の構築、礎石の調達、運搬、据付け、基壇廻りの材料の調達、運搬、建築材料の墨付け、刻み、それらの仕事に伴う工具などの確保、棟上、屋根下地、ここでやっと屋根の瓦が葺かれることになる。それまでに粘土のある場所をさがし、採集、水簸、窯の構築、作業小屋を建て、製品の製造、乾燥、燃料の薪の伐採、運搬、製品の窯詰、焼成、窯出し、製品の仕分、製品を現場まで運搬、土葺きと考えられるので粘土の調達、スサ入粘土作り、屋根瓦を葺き固定する。さらに外壁を始め室内の細工、塔の相輪を始めとする室内外に使用する金具、丈六仏を含め荘厳具の製造、納経の書写等、僧侶を含めこれらにかかわる人達は相当数にのぼるものと考えられる。費用も相当な額がかかったであろう。

さて、これらにかかった期間について大脇潔氏の「飛鳥～奈良時代主要寺院造営年表」を参考に考えてみたい（第３図)。各寺院の規模、発願者によって事情が違うであろうが、天皇家、国大寺のような



A



B

（仏堂の受容と古代国家より転載）

第２図　Ａ：法隆寺式伽藍の始まり　Ｂ：飛鳥藤原京の古代寺院金堂規模比較図

国費で造営し、永年封戸を施入される飛鳥寺、豊浦寺、百済大寺、大安寺、川原寺、本薬師寺、薬師寺、東大寺、西大寺などは20～30年の期間で完成している寺院が多いようである。焼亡などを含め造営の事情により、50～60年の期間を要した斑鳩寺、法隆寺などもある。また氏族寺院と考えられている中には比較的造営期間の短い野中寺も見られるが概して40～50年と長期にわたる。山田寺、坂田寺、当麻寺、興福寺がある。これは伽藍の規模にもよるが、造営基盤である経済力によるのであろう。

さて、相模国の初期寺院から国分寺の造営期間を各寺院の古瓦の分類と生産瓦窯を含めた相関関係から推定してまとめてみたい（第１表）。先述したように古瓦の特徴から下寺尾廃寺から順次、継続的に千葉地廃寺、宗元寺、深田廃寺へ、また生産瓦窯を異にする、千代廃寺から吹切遺跡へ造営された。

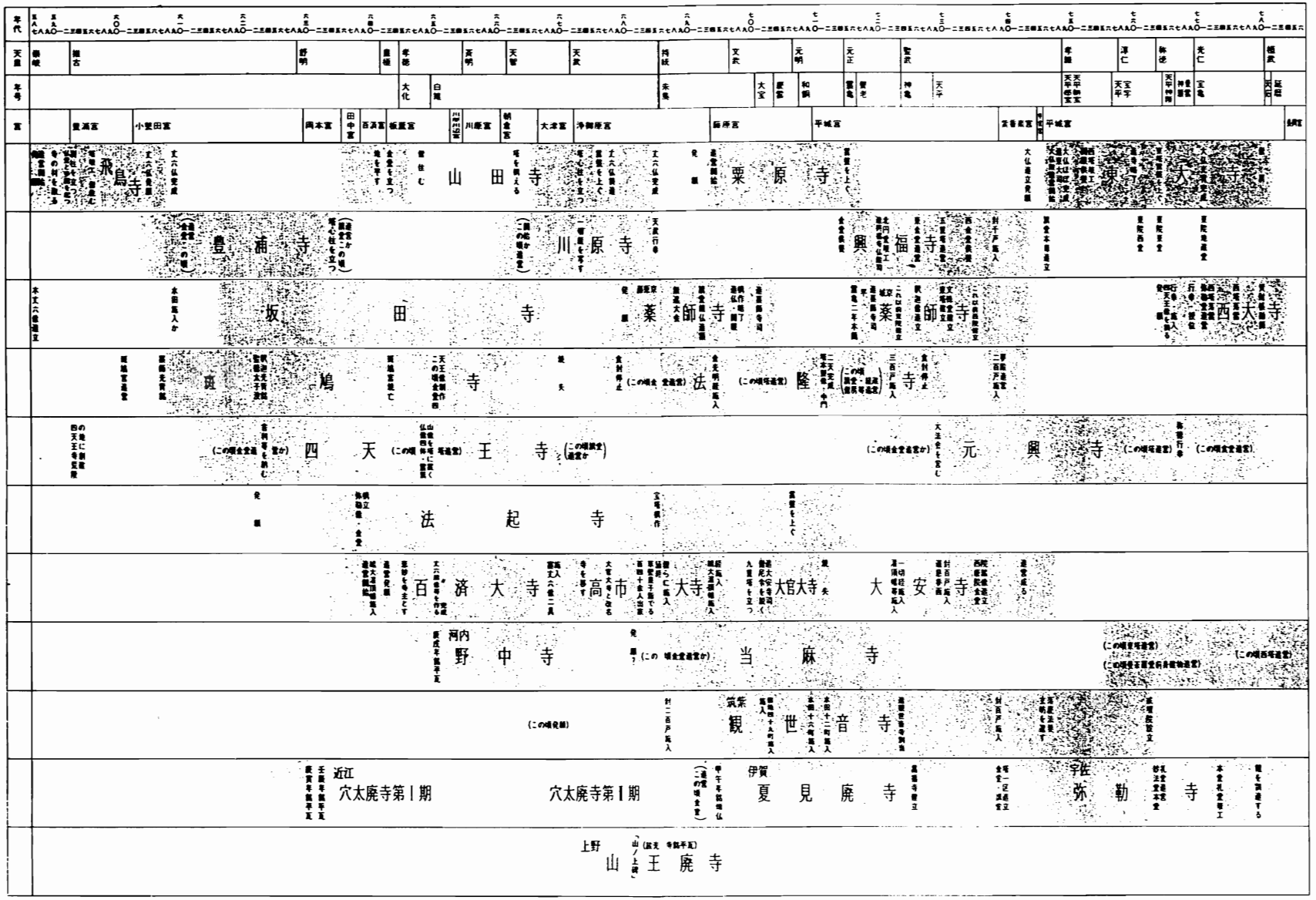
生産瓦窯の不明な下寺尾型を主体とする下寺尾廃寺は天智朝後半から天武朝の20年前後、石井瓦窯を主体とする千葉地廃寺は法塔瓦窯、からさわ瓦窯の製品が含まれることから天武朝後半から持統・文武をへて元明朝の霊亀年間頃の30～40年前後であろうが、主要堂塔は持統朝頃には完成していたのであろう。法塔瓦窯の製品を主体とし、石井瓦窯を若干含む宗元寺は持統朝から聖武朝の神亀・天平初年頃までの約40年前後と考えられるが、文武朝頃には主要堂塔は完成していたと思われる。深田廃寺は法塔瓦窯後半期の製品を主体としており、神亀・天平年間の20年前後と推定される。千代廃寺はからさわ瓦窯の製品で占められており、文武朝から聖武朝の40～50年と考えられるが、からさわ瓦窯の最盛期は神亀年間(724)から天平初年(730)頃と推定されるので、主要堂塔はこの頃までに完成していたであろう。吹切遺跡はからさわ瓦窯と不明瓦窯が見られ、20年以内であろう。

相模国分寺については先述したように天平９年には開始され、僧・尼寺とも760年代には整って いたものと考えられる。

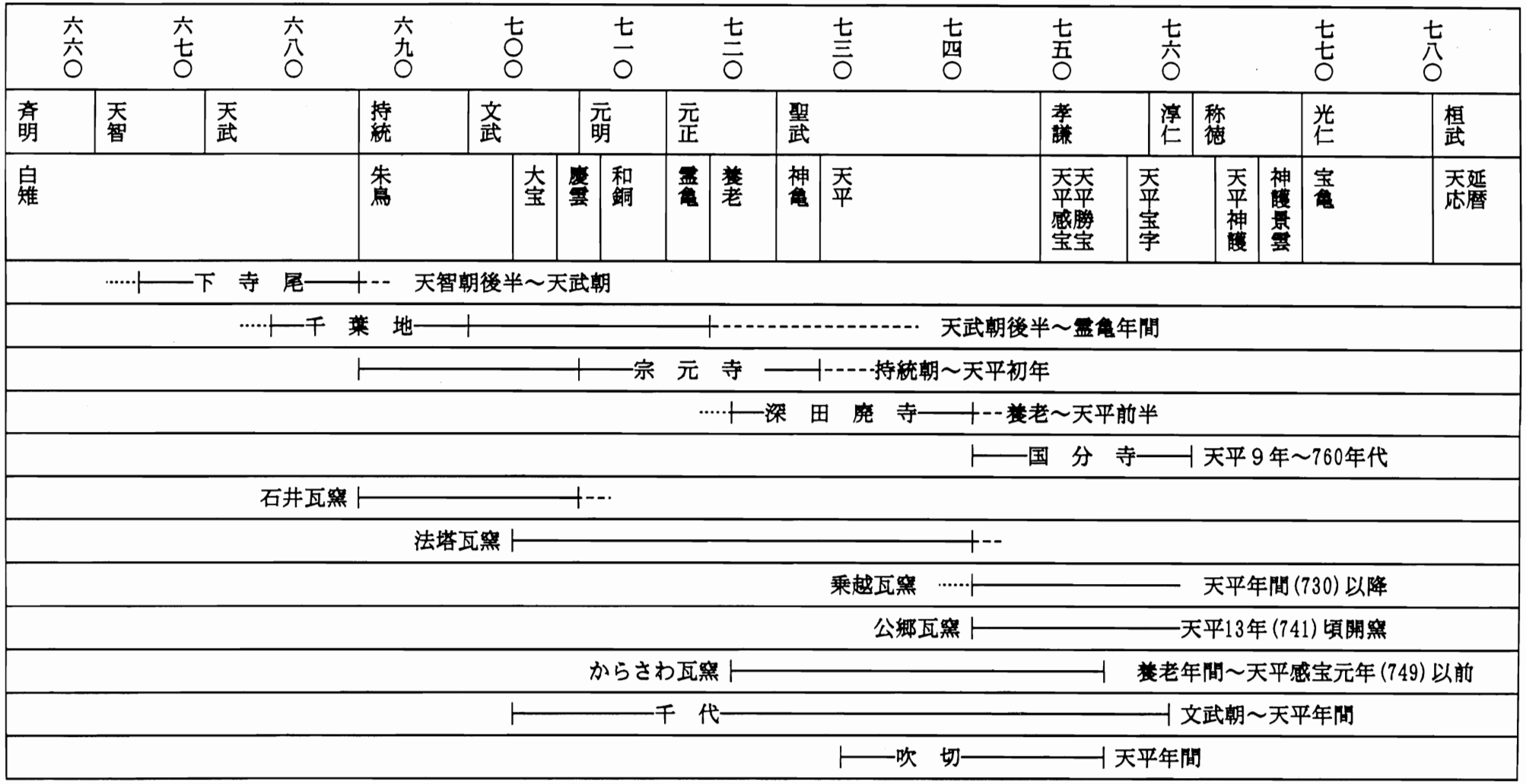
これらの寺院の造営期間はあくまでも推定したもので、造営の計画から堂塔の完成、回廊などを含め、寺院地の区画の整備までを含めたもので、各瓦窯の創業はこの中に含まれており実際は数年単位であろう。屋瓦の必要性から考えれば、堂塔の上棟ごとに供給されたのか、建設の規模と屋根勾配が決まり、図板を描ければ、必要な使用枚数が計算できるので、一括で発注したのか、古瓦の分類、あるいは瓦窯の調査によって理解するのはかなり難しい。また、相模の場合は瓦窯の関係から、差し替え瓦として保存しておく量も相当多かったと推定され、専用の瓦倉も考えられ、推定薬師堂跡、瓦溜りなども、そうゆう関係とも考えられなくもない。しかし、両者の状況証拠を考え合わせれば、上記のような期間を設定できるが、今後の寺院の調査、瓦窯の調査、古瓦の更なる分析によって、より正確な年代が導き出されることを期待したい。

6　仏教受容の階層

古瓦の研究をしていると、古瓦の分類と系統、年代的な問題に主眼を置きがちだが、寺院造営氏族の実態にも眼を向けてみたい。第４Ａ図は「学習漫画　日本の歴史２　大王の国づくり」であるが、大和地域の蘇我氏を始めとした各氏族の領域を示したもので、氏族の居宅と寺院、倉庫としての屯倉があることが理解し得る。本来はこれに墓域も伴うと思われるが、考古学的には未確認のものが多い。第４Ｂ



第３図　飛鳥～奈良時代主要寺院造営年表



第１表　相模の古代寺院造営年表

2001.3.11

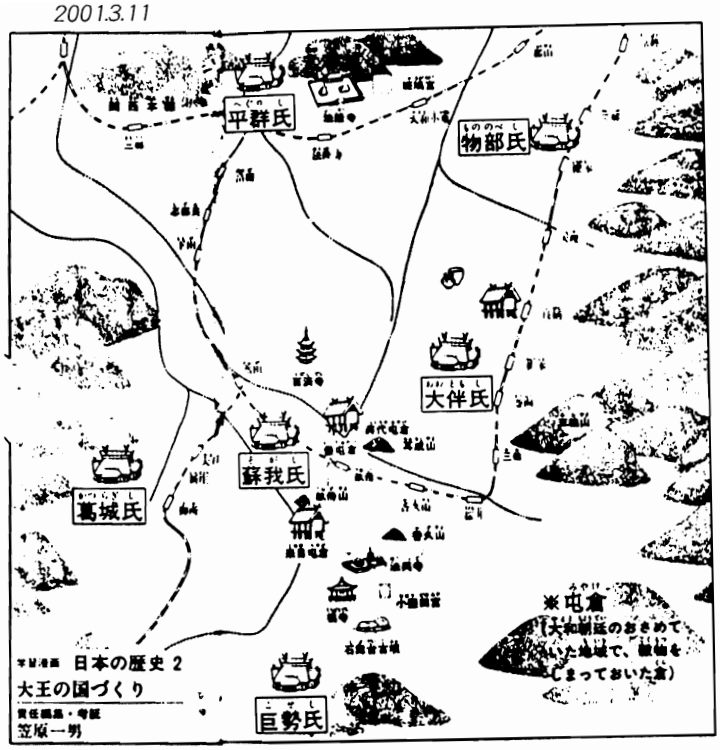
図は大阪府泉南市の海会寺であるが、東方に海会寺建立氏族の居宅を含む集落が調査されている。いわゆる官衙的な建物を配置をしている。寺院と組になる官衙的建物は郡衙と考えられているが、家政機関としての機能が含まれており、事務を行う施設、倉庫なども含まれていたのであろう。この中には館と呼ばれているが、客館も含めて居宅と考えても良いのではないか。また、行政機関の郡衙として確立している場合は占地を変えて居宅が存在した場合もあろう。今後の官衙的建物の分析によって性格が明らかになるであろう。

第４Ｃ図は茨城県つくば市の中原遺跡である。この遺跡の東方には河内郡衙推定地と九重廃寺跡がある。遺跡は３年にわたり約55,500㎡が調査され、竪穴式住居跡505軒、掘立柱建物跡130棟、土坑2,735基が発見された。遺跡の中に掘立柱建物が集中している５地区が表現されている。第３、第４、第５集中区の掘立柱建物をみるとそれぞれ若干様相の違いが認められる。第３集中区は総柱式の建物を含み、側柱式の南北棟の建物が東に南北に５棟、同じく南北棟の建物が南に４棟並ぶなど、倉庫的な様相が見られる。建物群の中心には周辺の竪穴式住居に比して大型の竪穴式住居がある。第４集中区は中心に大型の竪穴式住居を配置し、北方に東西棟を３棟、東方に南北棟を２棟、南方に東西棟を配しており、居宅的な様相がうかがわれる。第５集中区は北方には東西棟の四面庇付建物、南には西・北に２面庇を持つ東西棟、中には南北棟の大型側柱建物２棟と小型側柱建物１棟を東西に配置している。四面庇が仏堂、二面庇が僧坊と考えられ仏教施設であろう。このようなことから３つの掘立柱建物の集中区は東から倉庫群、居宅、仏教施設として間違いはなかろう。この建物群を囲むようにある200軒以上の竪穴式住居も一体と考えられる。つまり、これらを含めて「戸」を形成していると推定される。郡司層と同じように戸主層においても規模的には小さいが、居宅内に仏教的な空間を維持していたようである。僧房的建物から私度僧がいたと考えられる。その維持運営も戸主が行っていたことからすれば、「村落内寺院」と言うよりは「居宅内寺院」と呼ぶべきであろう。また中央の東西に走る道の北側も同じく１つの「戸」と考えられる。ただ、掘立柱建物の構成は、第１集中区の中に東側に倉庫群、西側に居宅を配し、第２集中区に仏教施設を独立させ、「居宅内寺院」の維持運営を行っている。これらは河内郡衙と九重廃寺の近くにあるが、特殊なものではないであろう。

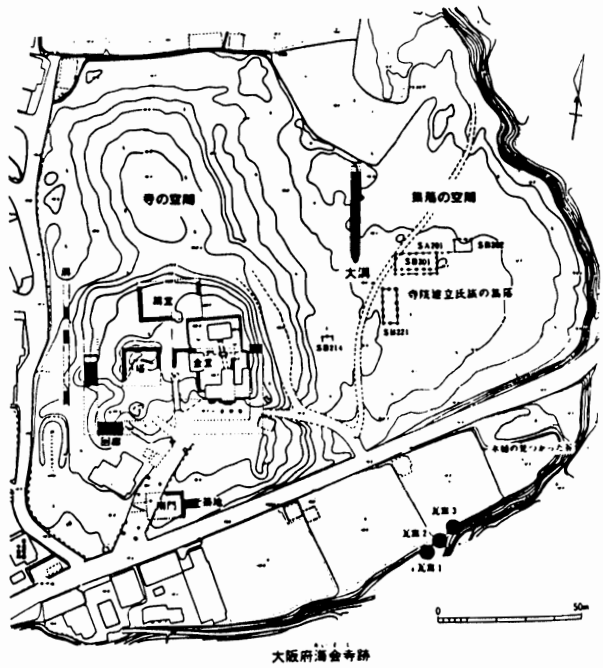
相模国の場合、南鍛冶山遺跡などはこの類に入る可能性がある。東耕地遺跡は「戸」の中の仏教施設部分の調査、上台遺跡は倉庫群の調査、本郷遺跡は溝に囲まれ、鍵前が多く出土している。これらは郡司相当の居宅の倉庫群の一部の調査と考えられる。愛名宮地遺跡の礎石建物跡、馬場遺跡の礎石建物跡、宮添遺跡は仏堂で良いであろう。藪根不動原Ａ地区、Ｂ地区の双堂式と言われるものも仏堂で良いと思われるが、本堂より礼堂の建て替えが多く傷むのが早いのであろうか。Ａ地区の18号は瓦塔を設置したのであろうか。

また、愛名宮地遺跡をはじめ、瓦塔の出土している遺跡は鎮護国家思想を残しているように思える。飛鳥・白鳳寺院の多くは天皇の菩提、病気の平癒、氏族の鎮護と繁栄を願って建立されたものが多く、それの集大成が全国の国分寺の建立であった。それらが民衆の中に入り込むまでに、それぞれの階層で金堂、塔、講堂、僧房、経蔵、鐘蔵、中門の七堂伽藍から経蔵、鐘蔵、中門がはぶかれ、塔が瓦塔にな

2001.3.11



A



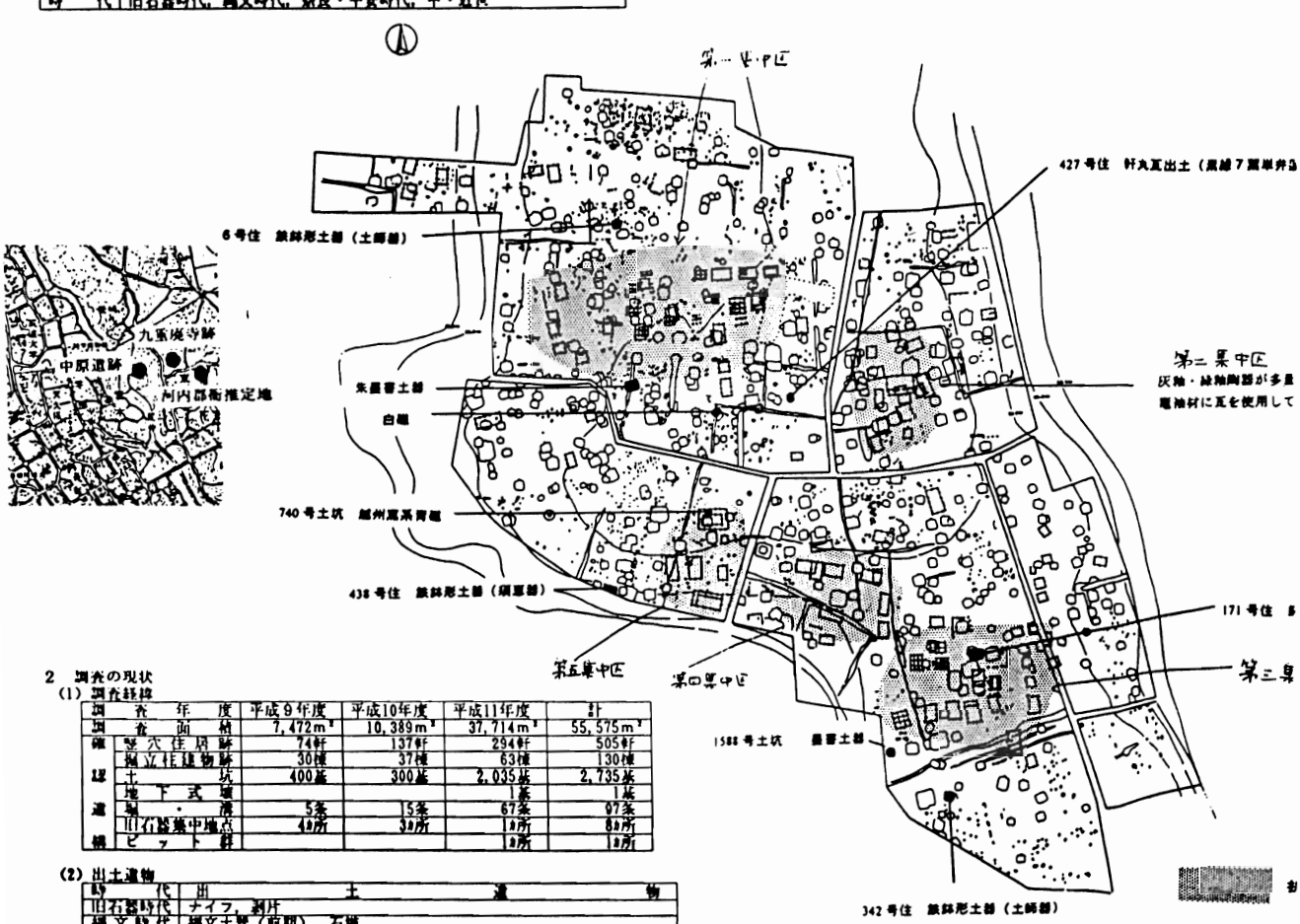
B

第9回歴史の華ひらく泉南シンポジウム
仏教の受容と古代国家
―日本古代国家の成立を探る・Ⅲ―
1985年11月23日
発行　泉南市・泉南市教育委員会
住所　〒590-05
泉南市樽井一丁目1番1号
TEL　0724-83-0001

平成11年度　中原遺跡調査の概要

1　調査遺跡

遺跡名	中原遺跡　（略称：THN）
所在地	つくば市大字東国字中原180番地の1ほか
調査面積	本年度-37,714m²　（総面積55,575m²）
現況	畑
時代	旧石器時代，縄文時代，奈良・平安時代，中・近世



2　調査の現状

(1) 調査経緯

調査年度		平成9年度	平成10年度	平成11年度	計
調査面積		7,472m²	10,389m²	37,714m²	55,575m²
確認遺構	竪穴住居跡	74軒	137軒	294軒	505軒
	掘立柱建物跡	30棟	37棟	63棟	130棟
	土坑	400基	300基	2,035基	2,735基
	地下式壙			1基	1基
	溝	5条	15条	67条	97条
	旧石器集中地点	4ヵ所	3ヵ所	1ヵ所	8ヵ所
	ピット群			1ヵ所	1ヵ所

(2) 出土遺物

時代	出土遺物
旧石器時代	ナイフ，剥片
縄文時代	縄文土器（前期），石鏃
奈良・平安時代	土師器・須恵器（墨書土器，円面硯，二面硯，鉄鉢形含む），緑釉・灰釉陶器，青磁，白磁，瓦，支脚（土・石製），鉄製品（鍋，刀子，鎌，釘），銅鏡，銅帯具，紡錘車（鉄・石製），砥石，炭化米，獣骨
中世以降	陶磁器，古銭

C（平成11年度現地説明会資料）

第4図　A：大和の豪族たち　B：海会寺と建立氏族の集落　C：中原遺跡

第5図　変則単弁鐙瓦の系譜

り、金堂と講堂が仏堂（本堂）に、さらに本堂と僧房に変化をしていったのであろう。これには官僧から隠遁した私度僧の果たした役割が大きく、民衆は阿弥陀仏、薬師仏などの仏像崇拝や読経により、自己の健康あるいは成仏を願った。また、私度僧が人の死、いわゆる葬式に係わるようになり、遊行僧の存在も考えねばならないが、無住の本堂もあったであろう。その無住の本堂を村落で維持運営していった施設を「村落内寺院」と呼ぶのであろう。

最後に個々の仏堂の集成ではなく、大きな集落の中で、掘立柱建物の性格を考えないと見間違う場合もあろう。

7　変則単弁鐙瓦の系譜

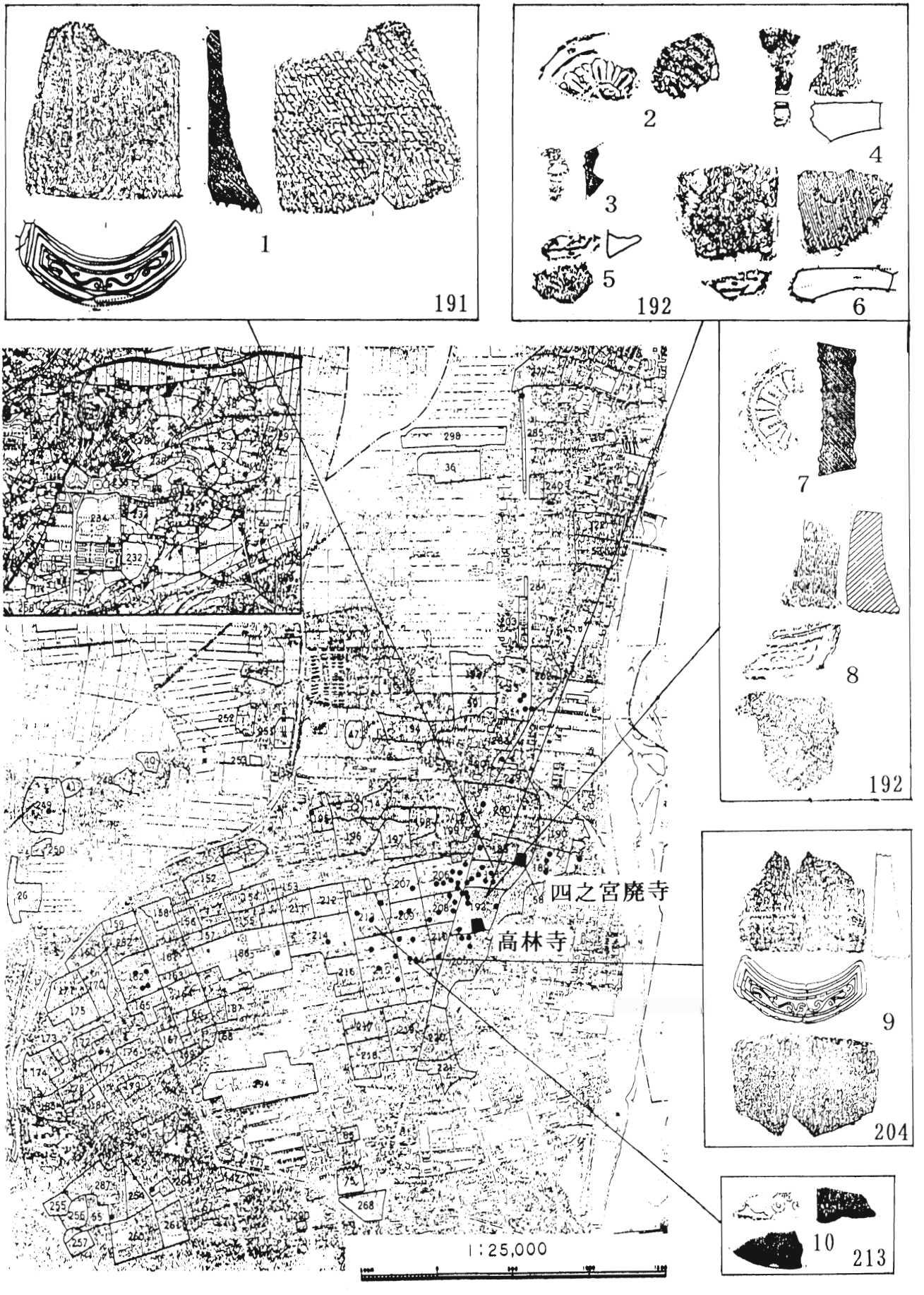
相模国の鐙瓦はそれぞれ特徴のある文様であるが、この変則単弁鐙瓦も変っている（第５図）。八弁のものと六弁のものがある。八弁のものは高林寺、宗元寺、千代廃寺から出土している。バット状の単弁に棒状の子葉が入り、弁の幅が狭い。間弁も弁状に見える。間弁の頭に丸く花状の切り込みが入り軸は中房まで達している。間弁幅は花弁よりやや広い。中房の蓮子は高林寺のものは不明であるが宗元寺、千代廃寺のものは１＋８である。外区の珠文は16個である。六弁のものは相模国分寺の僧・尼寺と四之宮廃寺から出土している。花弁・間弁ともふくらみがなく、簡略化される。中房は中心蓮子がなく４個、外区の珠文は16個と推定される。

珠文縁八葉変則単弁鐙瓦は花弁、間弁の凸線が細く、裏面が指ナデ仕上げされている。宗元寺のものは凸線がやや太くなり笵キズがある。千代廃寺には生産地瓦窯を違にする２種があり、胎土と焼成の違いにより、径に大小があるが、凸線も太くなり、中房も丸みを帯びるようになる。笵キズにより宗元寺からの同笵である。高林寺のものと宗元寺のものは同笵関係を確認していないが、同笵の可能性大である。この珠文縁八葉変則単弁鐙瓦は飛雲文宇瓦と組になる。文様は中央に上方に伸びる雲を配し、左右それぞれに外方に伸びる雲を３個配し、外区の珠文は上区に６個、下区に６個、左右の外区に各１個を配している。飛雲文宇瓦も文様の配置と個々の特徴から同笵と推定される。高林寺の鐙瓦と宇瓦の組は胎土、色調から同一瓦窯で生産されたと思われるが、宗元寺は鐙瓦と宇瓦の胎土の違いから、鐙瓦は不明、宇瓦は公郷瓦窯の製品である。千代廃寺の鐙瓦も面径の大小によって胎土、笵の摩耗、製作技法の違いから、生産瓦窯は別である。宇瓦も同じく胎土から分かれる。千代廃寺では珠文縁八葉複弁鐙瓦と葡萄唐草文宇瓦が主体を占め、珠文縁八葉単弁鐙瓦と飛雲文宇瓦の組は客体的である。宗元寺においてもこの単弁鐙瓦と飛雲文宇瓦は客体的であり、改修・補修瓦として使用されたものと考えられる。

高林寺からはこの珠文縁八葉変則単弁鐙瓦と飛雲文宇瓦の組しか出土していない。このように考えると、この組合せは大住郡の郡名寺院の瓦として採用されたものと推定される。飛雲文宇瓦の断面が国分尼寺Ⅰｂ類に似ていることから（第１図）、国分寺造営の後半、８世紀第３四半期後葉頃と考えられる。

千代廃寺の組合せは８世紀第４四半期頃になるであろう。

珠文縁六葉変則単弁鐙瓦は国分僧寺Ⅱ類の再建期としたものだが、僧寺、尼寺からともに出土してい



第６図　高林寺・四之宮廃寺周辺の古瓦の分布

る。珠文縁八葉変則単弁鐙瓦を簡略化したもので、花弁、間弁とも直線的となり、間弁端の切り込みもなく、内区の界線に直に接している。中房には中心蓮子がなく４個、外区には推定16個の珠文が廻る。組となる宇瓦は僧寺Ⅰ類からの流れを受けた簡略化した均正唐草文宇瓦で、中心から唐草が左右に２回転する。瓦当厚が厚く、顎の曲線が大きい。この組合せは瓦尾根瓦窯で生産されている。同笵と考えられる鐙瓦、宇瓦が四之宮廃寺から出土している。しかし、胎土、鐙瓦の製作技法、宇瓦の顎の断面の違い、縄叩きも見られるが、大きめの斜格子叩きを使用するなど生産瓦窯が違う。時期は国分寺再建期が弘仁10年(819)～９世紀第２四半期と推定されることから、９世紀 第２四半期後半から９世紀第３四半期と考えられる。

このように、珠文縁八葉変則単弁鐙瓦と飛雲文宇瓦の組合せと珠文縁六葉変則単弁鐙瓦と均正唐草文宇瓦の組合せは一つの流れとして捉えることができる。先の組合せは８世紀後半の動きで、大住郡の郡名寺院で採用され、寺観が整ったころに三浦郡、続いて足下郡で使用された。国分寺の再建期の組合せが、四之宮廃寺に使用されていることから、再建の造瓦に大住郡が大きく関わり四之宮廃寺も国府付属寺院的な意味を持っているかも知れない。

最近、平塚市博物館から「平塚市内出土の古瓦」と題し、基礎資料集成が公刊された。これをもとに高林寺と四之宮廃寺周辺の文様瓦を地図上に落としてみた（第６図）。高林寺を含む192地区 からは、高林寺の瓦と四之宮廃寺の両寺の瓦が出土し、204地区と191地区から四之宮廃寺のものが出土している。四之宮廃寺を含む185地区からは文様瓦が出土していない。男瓦、女瓦もどちらかというと、高林寺を中心に出土している傾向がある。高林寺と四之宮廃寺は推定地の違いと古瓦から別な寺院と考えているが、この結果からすると、高林寺において８世紀後半の珠文縁八葉変則単弁蓮花文鐙瓦と９世紀中頃の珠文縁六葉変則単弁蓮花文鐙瓦が使用されたようにも理解し得る。いづれにしても今後の調査事例と男瓦、女瓦の分類をして結論を出したいと思う。

８　おわりに

発表の主旨に従って、縷々書いてきたが、結論めいたものもあるが、まだまだ解決しなければならない問題が多々あることをあらためて認識した。何よりも考古学は遺跡の調査と物の分析であるから遺跡所在地の人たちに、寺院、官衙の重要性を理解して頂けたらと思う。

最後に本稿を草するにあたり、多くの人たちにお世話になった。ご芳名を記して感謝の意としたい。山路直充、西川雄太、國平健三、岡本孝之、星　正夫、竹澤嘉範、稲村　繁、須田　誠、滝澤　亮、小池　聡

註

（１）　宗元寺の忍冬交飾蓮蕾文と奈良・西安寺の西安寺式鐙瓦の同笵認定の過程で確認したもので平成12年(2000)５月20・21日に国士舘大学で開催された第66回日本考古学総会の発表要旨に「相模宗元寺の西安寺式鐙瓦について」として要約しておいた。

（２）　平成12年２月22日に横須賀市、赤星直忠博士文化財資料館で瓦を実見させて頂いた。その折り、神奈川県

史には公郷瓦窯の飛雲文宇瓦とともに図版に載っているが、文章にはないことを担当の竹澤嘉範氏に話したところ、同氏が整理されている赤星ノートの未発表資料の公郷瓦窯の文章中にも忍冬交飾蓮蕾文鐙瓦の出土は記述していないことを指摘して頂いた。
「赤星直忠博士文化財資料館だより」第７号　1998年７月発行
（３）　千代廃寺の鐙瓦の接合技法であるＶ字切り欠き資料については別項を考えている。
（４）　平成12年(2000)２月２日に常陸国分尼寺の調査中に実見させて頂いた。

文献

神奈川県考古学会　2000『かながわの古代寺院』
泉南市教育委員会　1995『仏教の受容と古代国家』
泉南市教育委員会　1997『古代寺院の成立と展開』
帝塚山考古学研究所　1991『古代の寺を考える－年代・氏族・交流－』
栃木県立しもつけ風土記の丘資料館　1999『仏堂のある風景　古代のムラと仏教信仰』
関東古瓦研究会　1994『シンポジウム　関東の国分寺　資料編』
関東古瓦研究会　1997『シンポジウム　関東の初期寺院　資料編』
海老名市市史編さん室　1998『海老名市史　1　資料編　原始・古代』
平塚市博物館市史編さん担当　2000『平塚市内出土の古瓦　平塚市史別編 考古 基礎資料集成１』
森　郁夫　1995「法隆寺式伽藍配置の成立」『帝塚山大学教養部紀要』第43輯

「かながわの古代寺院」に寄せて

鈴木　靖民

神奈川県考古学会主催の1999年度考古学講座は、「かながわの古代寺院」と題して、川崎市影向寺遺跡、横須賀市宗元寺跡、小田原市千代廃寺、茅ケ崎市下寺尾廃寺、相模国分寺・国分尼寺跡、さらに神奈川県内のいわゆる村落内寺院と火葬墓について、それぞれ報告とコメントが行われた。その上、相模国の古代寺院を、特に瓦の生産・流通の問題を通して展望した特別講演もなされた。

会場は、満員になる程の多数の研究者や市民を集め、古代史・考古学に対する関心の高さが窺われた。講座の内容全体も、各寺院跡についての研究史・学説史をふまえ、現在の研究の到達点をコンパクトに提示するもので、考古学のみでなく、文献による古代史や仏教史を専攻する人たちにとって、有益なものであった。あらかじめ、配布されたレジュメも、各報告はもとより、関連する図や年表、遺跡目録などを多数掲載し、周到な資料集であった。長年、神奈川県内に住み、考古学・文献史学といった領域を越えた地域史研究を目指す筆者にとっても、充実した一日を過ごすことができた。

講座を企画した、岡本孝之氏を始め、運営にかかわった方々、司会として進行にあたった大上周三・明石新両氏の労を多としたい。

次に、当日、急遽、まとめのコメントを求められた筆者の、倉卒の間の雑感を記したい。

まず、神奈川県内の古代寺院というまとまった研究テーマのもと、これまで調査・研究に携わってきた方々が一堂に会し、主要な寺院関連遺跡の研究成果を披瀝したことを高く評価したい。過去に、いわゆる九阪などによる全国的な初期寺院のシンポジウムや国立博物館の特別展における瓦の展示、関東古瓦研究会のシンポジウム、等々で、神奈川県内の古代の寺院や瓦が取り挙げられることはもちろんあったが、いわばそこから離れて独自に講座・シンポジウムを初めて本格的に開催するに至ったのであり、神奈川県内を主とする古代寺院・瓦研究、あるいは古代地域史研究にとって、画期的なできごとである。

これは近年における、当日度々名前が挙げられた赤星直忠氏を始めとする先達の業績を追跡して明らかにしようとする地道な努力と、国分寺・国分尼寺や、直前に公表された下寺尾廃寺の関連遺跡などに顕著な、新しい調査の成果、古瓦の編年・系統などの研究の進展とが背景になり、実現をみたものと思われる。

しかし、当日の時間的制約を考慮しても、いくつかの問題がないわけではなかった。上にも述べたように、七世紀後半から八世紀初めに創建されたいわゆる初期寺院と、国分寺・国分尼寺と、それに加えて民間の堂宇・寺院の、三種を一緒くたにした嫌いは否定できない。影向寺以下の寺院は、武蔵・相模の諸郡に分布する在地の有力首長（豪族）層が伽藍を建立して仏像を安置し、僧侶を招き、教典を備え、その後も土地や人々を擁して経営にあたる地域の宗教拠点であるとみなされる。それに対して、国分二寺は741年、鎮護国家の功徳、王権の権威強化のために出された詔に基づいて造営が始まったいわば国立の寺院である。時代や設置の主体、何よりも理念・目標を異にするのである。民間の寺院については、

山寺を含むが、有力地方寺院よりも造営規模や陣容の劣るものが想定されている。報告からは、神奈川県内ではまだまだ遺構・遺物などによる検出が僅少であるとの印象を受けた。

これらの多様な寺院の歴史的な変遷・展開を考えること、また造営主体や僧尼などの人的な構成、瓦などの造営に伴う技術などの側面をめぐっての、寺院相互の関連・興隆の様相をフロアーを含めて議論することが望ましかった。そうした実態の考古学的考察をもとに、寺院個々の集落や集団における役割・機能も解明しえるであろう。現状では、神奈川県内で古代の寺院の基壇、仏像を安置する須弥壇や台座跡などは出土していない。塔・金堂・講堂・門などの伽藍配置の推定もまちまちで確定していないが、寺院で何が行われたか、換言すれば、寺々での宗教活動とそれに関与・参加した人たちのありようを彷彿させる研究が必要である。1999年秋、小田原市で筆者などが催した千代廃寺の間近にある千代南原遺跡のシンポジウム、最近の下寺尾廃寺に関連する河床遺跡に大量に投棄された墨書土器などの検討により、地方の官庁・寺院での行事・儀式・祭祀の神仏習合的な、あるいは道教的な内容が徐々に姿を現しつつあることも注目したい。

南原遺跡の場合、捨てられた斎串や鳥・刀などの形代を始めとする木製品は平城京の律令的祭祀の用具と共通する。下寺尾廃寺では写経のほか、土器への墨書が行われ、それは一般に神に何かを祈願する呪術宗教的行為と考えられる。その一点は坏の内外に「土」字を書くが、そののち漆を使う作業で転用されたことが付着した漆紙文書から判明する。それらの在地の祭祀の実態は、木製品や墨書土器への着目・分析から導かれることに留意しなければならないのである。

終わりに、当日の報告でもしばしば耳にした「郡寺」なる用語について述べよう。古代の郡の制度や行政機能として、寺院を付属させる必要はなく、仏教なり宗教思想なりも必須の要件ではない。この点は国府および国分二寺の関係との大きな違いである。郡家の近くに存在する寺院は、『日本霊異記』『出雲国風土記』などをみると、郡司層が仏教信仰を受容し、僧侶を招いて造営する例が知られる。また最近の研究によれば、寺院は家産維持を目的とする性格を内包している。また郡司層には大少領と主政・主帳、あるいは税長などの雑任など各種の首長たちが含まれる。あるいはそうした公職に就かない地域の首長たちが存在する場合もあろう。したがって、これらの多様な首長層の動きのなかで、寺院を創建・経営するものが立ち現れるのであり、一つの郡家につき一つの有力寺院だけがセットをなして存在するという規則性は何らない。一郡に有力寺院がいくつもある例は近畿とその周辺に容易に認められる。逆に、最近公表された川崎市影向寺遺跡出土の「无射志国任（荏カ）原評」と刻された瓦は、7世紀後半、同地は橘花評なので、一つの評を越えて隣の評にも跨る首長層を基盤として建立された寺もあったことを示唆する。

以上、「かながわの古代寺院」での報告・コメント・講演に啓発されて、所感の二、三を略記したが、今後、寺院についても、郡家・国府と同様に、一定の広がりをもつ地域社会のなかでの景観を追求する問題意識を持ち続ける研究が益々要求されよう。

まとめ

小出　義治

古代寺院研究の基本は瓦の研究から始まることは改めて述べるまでもないことである。従って現在までに多くの先人達によって積み重ねられて来た研究成果は詳細を尽くし、十分に評価されるもので、それを踏まえての本日発表の県下諸廃寺の創建期推定には異論の余地はないと思われる。相模国分寺以前のこれらの古寺は、7世紀の第4四半期頃から8世紀前半頃の間に相次いで競うように建立されたものと理解される。しかもこのようなラッシュ現象は独り相模国のみではないようで、この時期に建立されたとみられる寺院の数は東国には少くない。一体何があってこのような現象が引きおこされたのだろうか。その背景は何であったのか。

今日の発表を拝聴していて感じた幾つかの問題点の中の一つであった。

しかし、よく考えてみると、何にも突如として起ったものではなく、既に畿内では538年に百済国王から伝えられたとする仏教思想は、国家的支援を得て流布定着した結果、次第に周辺地域にも波及する気運が熟しつつあった。特に朝廷と関係の深かった東国には、新たに土地を与えられた帰化人系入植者集団などによって弘められる要因は十分にあり、非公認の道教もそれに伴って東国には早くから伝わったと思われる。そして天武朝頃には特に道教の神仙思想に由来する現世利益や不老長寿の信仰が仏教にも採り容れられて薬師信仰が興り、以後平安時代に入って阿弥陀信仰が起るまで仏法界の主流となるものであるが、その薬師三尊を祀る薬師寺の東塔の露盤銘には天武・持統両帝が夫々大病平癒の悲願を継承し、二代にわたって建立を達成したことを記し、夫婦相愛のエピソードとして知られているが、諸病平癒の薬師信仰、つまりは現世利益と云う民衆の強い欲求に結びつき、7世紀末を迎える頃から薬師如来を主導とする造寺活動が活発化するに至ったものであろう。

勿論、この時期に建立された千代廃寺の本尊も薬師如来であったと考えるし、造寺の唱道勧進に尽瘁したのは郡司（評督）級の内福の名望家であったろうと思われる。

然し、それにしても後に諸国の国分寺が勅願により、各国の国司が管掌して着手した国家的事業であったにもかかわらず、督令を重ねてなお8年から16年もの歳月を要し、莫大な資財と労力を費している。その中には国司の怠慢による延引が考えられるにしても、七堂伽藍の完成は並大抵の事ではなく、更にその後の維持運営まで考えると、これらを私事として遂行することは至難に近いことであったと思われる。千代の廃寺もその例外ではなく、郡衙で扱うべき出挙米の記録かと思われる1号木簡が、寺務処理記録と考えられる2号木簡と共伴している事実は極めて暗示的であり、注目すべき事柄かと思われる。

次に村落内寺院についてであるが、やはり仏具、仏器が出土しないと、例え小堂宇的遺構があったとしても其れを直ちに仏寺と断定することは慎重を要することと思う。と云うことは道教の堂祠を意識し

なければならないと思うからである。

私はかって横須賀市の鉈切遺跡群の中で、皇極紀元年(641)七月条記載の全国的旱魃に関係するかと思われる牛頭を生贄にした祭祀の遺跡を調査したことがある。それはまさに水辺で河伯を祀った道教の祭りと考えられるもので、この場合は野外で行われていたが、近くの村落内に道観的小堂祠があったものと推測する。

延暦10年(791)には「応禁制殺牛用祭漢神事」として太政官符が出されている。仏教の場合と異なり公伝によらない漢神（道教）は、官からは次第に疎まれる存在となったようで、遂ぞ道教として定着することはなかったが、しかし陰陽道を始め仏教や神道にも日本の在来宗教の間に広く融合し、特に当時は帰化人系の民衆を中心に水面下での信仰が長く続いていたようである。従って道観的な小堂祠を村落内にもつ村もあったのではないかと推測する。しかし、おそらくは、そうした道観的小堂祠も仏教的小堂宇も遺構の上からだけでは区別することはむつかしいことかと思われる。

以上、所感の一、二を述べて総括に代えることとする。

参考

皇極紀元年秋７月戊寅条　河伯を祀る.

類聚三代格　巻19　禁制事

天平13、２、７　詔　応禁屠殺馬牛事

延暦10、９、16　官符、応禁制殺牛用祭漢神事

金子裕之篇 1988「律令期祭祀遺物集成」文部省科学研究費研究成果報告書Ⅱ

考古学講座『かながわの古代寺院』正誤表

頁	行等	誤	正
10	15行　本文	日立	常陸
11	19行　参考・引用文献	1997	1992（『多摩考古』第22号）
40	下4·3·2行　本文	殊文縁	珠文縁
41	12行　本文	殊文縁	珠文縁
51	第7図	都筑郡	都筑郡
54	下8行　本文	N -55° - W	N -0° 0′ 55″ - W
61	5行　本文	のに	に　（「の」トル）
61	9行　本文	「__本寺」	「罡本寺」
61	22行　本文	米B地区	B地区　（「米」トル）
62	9行　本文	掘り込んんで	掘り込んで（「ん」トル）
62	15行　本文	境川	引地川
62	20行　本文	__金具	鍔金具
66	5行　本文	かながわ考古財団	かながわ考古学財団
66	遺物一覧表出典文献　文献07 1970 坂本彰・他『港北ニュータウン地域内調査報告Ⅱ』		
69	遺物一覧表　四ノ宮下郷遺跡2区	文字の項目欠落	
71	愛名宮地遺跡　3-092·093	斗	斗栱
72	愛名宮地遺跡　3-100·102	斗	斗栱
72	神明久保遺跡第8地点　3-115·116	斗	斗栱
74	村落内寺院など分布図	宋元寺	宗元寺
89	第15図　鉄鉢形土器(1) 5-004	上谷本第2	薮根不動原
	5-006	薮根不動原	上谷本第2
90	第16図　鉄鉢形土器(2) 5-033	コウロ	上吉井南
	5-034	上吉井南	コウロ
97	21行　凡例3	22遺跡	26遺跡

編集後記に代えて

2000年3月5日の開講日は次のような寺田会長の挨拶で始まりました。当日の講師および執筆者の方々のお礼を会長の言葉そのまま捧げたいと存じます。

開会の挨拶

皆様、こんにちは！

今日は、働く者にとっては大変に貴重な日曜日にもかかわらず、朝早くから多数の皆様に御参集を賜りまして、誠に有り難う御座います。開会の当初から、こんなに多数の方々が御出席下さっていることは今までにないことですので、きっと参加者数の新記録が樹立されるかも知れません。

本日は、神奈川県考古学会が主催する1999年度の最後の行事と致しまして、毎年テーマを変えて実施して参りました「考古学講座」を開催する運びとなりました。

さて、今回のテーマは、『かながわの古代寺院』であります。「川崎市影向寺跡」、「横須賀市宗元寺跡」、「小田原市千代寺院跡」、「茅ケ崎市下寺尾寺院跡」、「相模国国分寺・国分尼寺跡」などの著名な古代寺院を中心に学習するだけでなく、村落内寺院や火葬墓にも眼を向けると同時に、古代寺院址の研究には欠かすことのできない「瓦」について、窯業史博物館の河野一也氏から『相模の古代寺院と瓦』と題する特別講演もお願いしてあります。

従来の講座は、「考古学入門講座」という肩書がついていて、内容的にも初心者向けの入門講座という性格がありましたが、この『かながわの古代寺院』の肩書には「入門」という２文字がなくて、「考古学講座」となっております。従いまして、本日の「考古学講座」は、やゝ専門的な高度な内容であることを覚悟して頂いて、神奈川県下の代表的な古代寺院に関する最新の研究成果とその問題点を、しっかりと身につけてお帰り頂きたいと思います。どうか途中で脱落しないで、最後まで御静聴下さいますよう宜しくお願いを申し上げます。

最後になりますが、『かながわの古代寺院』の企画・推進に当たった岡本孝之氏をはじめ講座担当の役員の方々、各寺院址について御報告して下さる発掘担当者の方々、コメントや「まとめ」の言葉をお願いした先生方、特別講演をお引き受け下さった河野一也氏、それに司会者の方々などの多数の御協力によりまして、本日の「考古学講座」が実現することになりました。この場をお借りしまして、会場の皆様と共に、関係者の方々に深く感謝の意を表す次第であります。

では、これをもちまして開会の挨拶と致します。

平成12年３月５日

神奈川県考古学会々長　　寺田兼方

当日は司会を大上周三・明石　新の両氏にお願いし、発表は本誌収録の方々のほかに須田　誠・大坪宣雄の両氏、コメントを川上久夫・國平健三・冨永樹之の各氏から賜ったことを付記いたします。　（お・い）

神奈川県考古学会 1999年度 考古学講座　成果集

かながわの古代寺院　研究の成果と課題

2001.3.11

発行　神奈川県考古学会

会長　寺田兼方

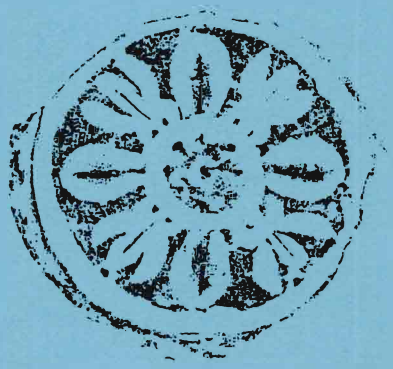
編集　岡本孝之・伊丹　徹

印刷　（株）　アルファ

神奈川県考古学会事務局　平塚市北金目1117　東海大学文学部考古学研究室内

本講座関係幹事

加藤　緑、白石浩之、明石　新、大坪宣雄、諏訪間順（講座担当幹事）、岡本孝之（担当幹事）、伊丹　徹（総務担当幹事）

表紙カット　　宗元寺（赤星直忠氏による）

裏　表　紙　　宗元寺瓦